

子どもに対する大人の責任を果たすために
自信を持った子どもを育てよう



第 20 回認定 NPO 法人おやじ日本全国大会

2022年おやじ日本全国大会を振り返って

今年の大会のテーマは、AIの進化などでどんな社会になるか予測できない未来に生きる今の子ども達に今の大人は何を伝えていかなければならないのか、でした。どんな社会であれ、人間は自分の考えを持ち、それを表現し、また、他者と理解しあう力が大事ですが、子ども達がそのような力を持てるように、私たち大人は最善を尽くしているのでしょうか？勉強ができるかどうかだけで子ども達を見てしまうことはないでしょうか？それが無用な劣等感を子ども達に持たせていないのでしょうか？学校、家庭、社会がどのように変われば子どもに対する大人の責任を果たせるのか、率直な議論が展開されました。パネラーは、教育現場、教育行政に長く携わった方、おやじの会のメンバーです。

コロナもあって、オン・オフで実施し、事後の視聴を含めると約1500名ほどの皆さんにお聞きいただきました。この議論は、我ながら、とても面白かったので、その詳細を記録に残し、それを広く多くの方々に読んでもらえればと考え、この冊子をまとめました。

大会の議論は、さまざまな調査が示す日本の子ども達の成長の遅さや自尊心の低さから出発しましたが、子ども達が自分の意見を持ち、ディベートし、また、他者と折り合う力を育てることを最重要の課題として、家庭も学校も社会も対応すべきだとの合意が得られたように思います。そのことが真の民主主義社会を築くことになるという趣旨の重要な指摘や、子ども達につけてほしいと願う力は、我々今の大人もまたわが身を振り返ることを求めているとの指摘もありました。

他方で、子ども達に、自尊心が高く、社会課題にも関心が深いアメリカなどで、多数の大人たちの、謙虚さを欠き、他者の意見に耳を傾けない振舞いを目にすると、こんな大人を大勢育てた国の子育てをそのまま受け入れることはできないと感じます。外国との比較は、それぞれの良い面と不十分な点をよく見極めることが大事なようです。

今回の議論にはまだまだ不十分な点多々あるのですが、普段考えていても話しにくいことが率直に語られていますので、とにもかくにも、この冊子をお読みください。そして感想をお寄せください。よろしく願いいたします。

末筆ながら、この大会をご支援くださった多くの方々に深く感謝申し上げます。

2022年8月
認定特定非営利活動法人おやじ日本 理事長 竹花 豊

基 調 講 演

工藤勇一氏 横浜創英中学・高等学校長
千代田区立麴町中学校校長在任中（6年間）に服装頭髪指導をしない、定期テストは廃止、固定担任制もなくすなど、「学校の当たり前」を見直した教育改革で注目を集めた。2020年4月より現職。

著書『学校の「当たり前」をやめた。一生徒も教師も変わる！ 公立名門中学校長の改革』（時事通信社）、『麴町中学校の型破り校長 非常識な教え』（SBクリエイティブ）著書多数。

本誌記載の内容は全て無断転載を禁じます。

今僕がいるのが横浜創英中学・高等学校です。全校生徒が約 1600 人、82 年目になりますが、約 20 年前に共学になり、十数年前に中学が立ち上がったという学校です。この学校の校長に着任していま 3 年目ですが、元々私立ならではのきめ細やかなサービス提供型の学校でした。それをいま大きく転換しようとしています。一番中心は自律型の学習です。子供が自ら学んでいくというシステムにカリキュラム、指導方法、さまざまなものを転換しています。

3 年前までいた学校が、千代田区の麴町中学校で、ここでは 6 年校長を務めました。数えたことはありませんが、何百項目の改善をしています。その中で主に話題になったのが、4 つあります。1 つ目が定期考査・宿題の廃止、2 つ目が固定担任制の廃止、3 つ目が服装・頭髪指導の廃止、4 つ目が数学での一斉指導の全廃です。

1 つ目については、日々の宿題、夏休み・冬休みの宿題を撤廃しました。併せて定期テストもやめました。

2 つ目については、教員側から見るとチームですべての子どもを見ています。保護者・生徒の立場からいくと逆指名をする。相談したい先生を常に変える。公立の中学校なので高校受験の進路相談などがありますが、3 年生の教員からだけではなくて 1 年・2 年の教員からも選べる。自分が指名した先生に進路相談をずっとしていくことも可能です。

3 つ目の服装頭髪指導の廃止は象徴的なもので、その他の校則もほぼゼロにしました。都内には私立を除いて公立の中学校だけで 600 校以上ありますが、僕が麴町中の校長に着任した当時は、その中でも断トツで厳しいルールの学校でした。服装、髪型、挨拶の仕方、職員室の入り方など、数えきれないくらいのルールがありました。見た目はとても真面目そうな学校でしたが、不登校の数が多く、僕が行った当時、1～3 年生がそれぞれ 4 学級、知的障がい学級、全部で 13 学級ありましたが、不登校は 30 人を超えていました。ほかの理由で休んでいる子どもも入れるともっともっと多い学校だったと思います。前後しますが、宿題も都内随一だったのではないかと思うぐらい、ものすごい量でした。

先ほど言ったとおり、着任 1 年目の 1 年生は 4 学級、120 人ぐらいの子どもが入学してきましたが、そのうち第一志望で麴町中学に入ってくる子どもはわずか 20 人ぐらいです。千代田区はとても教育熱心なご家庭が多く、ほとんどお子さんが私立中学を受験します。つまり、受験を失敗した

お子さんたち 100 人ということです。これが、僕が行った当時の麹町中の姿でした。

四つ目は数学の授業に限ってですが、一斉授業を 3 年間、完全にやめました。たぶん皆さんは想像がつかないと思うのですが、簡単に言えば江戸時代の寺子屋のようなイメージで学びます。学ぶ教材も自由です。学校が与えた教科書でもいいし、問題集でもいい。学び方も自由です。AI 型ソフトウェアやインターネットで調べたりしながら学ぶ子もいれば、教科書や問題集を中心にして勉強して、それを友だちに聞いたり、先生を呼んだりする。そんな授業スタイルです。なんと言っても驚くべきことは落ちこぼれが出なくなるということです。

その他にもさまざまな改革をしていったのですが、その背景を少し押さえておきたいと思います。まず僕が考えている学校改革は、時代が変わったからというよりも本質的なものです。元々教育のあるべき姿とは何なのかを追求していっただけなのですが、いまの社会が急激に変化していていることを考えると、教育改革はもう待たないだと思っています。社会はものすごく変化している。特にその中でも科学技術の進歩は人間がコントロール不可能になってきました。いつまでもこの科学技術の進歩を否定し受け入れないという教育をしていると、科学技術の進歩についていけなくて、課題をクリアすることができない。きちんと正面から受けて、課題の一つひとつ解決しながら、これについていく必要がある。こういう世の中になった。

その一方でグローバル化がどんどん進んでいて、食糧問題、環境問題、平和の問題など、世界にはさまざまな問題がありますが、どの問題も利害の対立が起こって簡単に解決できません。最近では SDG s という文字が巷で見られるようになりましたが、SDG s が掲げた 17 個の問題を人類が解決できないと、人類が滅びてしまうかもしれません。それぐらい切羽詰まった問題であり、世界中の国々のある意味、共通の敵のようなもので、国同士が戦っている暇はないということです。人類が存続するためにそれこそさまざまな問題を対話を通して解決しなければいけない、そんな時代になったということです。

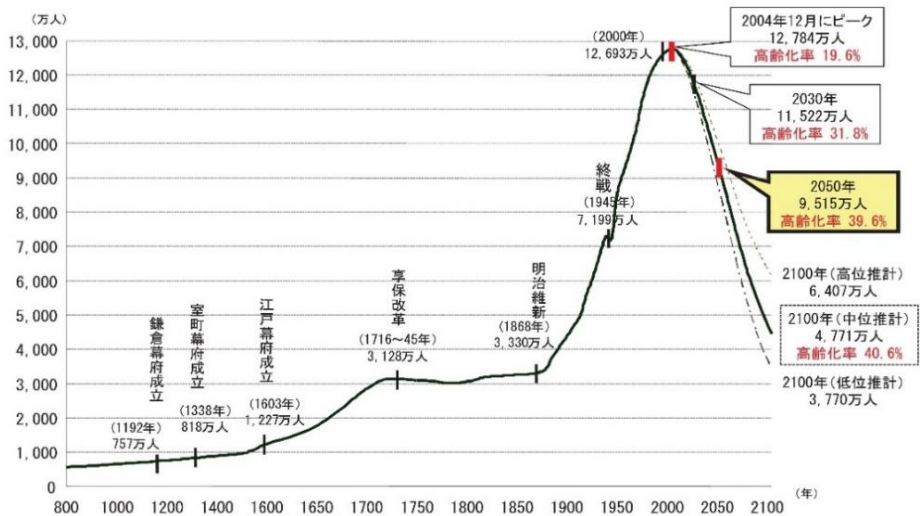
にもかかわらず日本はこの 30 年ぐらい、世界の変化にだんだんついていけなくなりました。たとえば平成元年のころ、世界の株式時価総額ランキングの上位 20 社の中になんと日本の企業が 14 社の 7 割、50 社に広げて

も 32 社と 64%が日本企業でした。それから 30 年経って、日本企業は 20 社の中に 1 社もありません。上位は、アップル、アマゾン、マイクロソフトとみなさんがよく知っている会社です。50 社まで広げてもトヨタ 1 社しかないという状況です。

たとえば平均年収ですが、平成元年の頃は世界の中でもトップクラスだった。1 人当たりの GDP も 2 位でした。経済がものすごく活気があった時代でした。それから約 30 年経っても物価も上がっていませんが、給料が全く上がらない。いまでは平均給与が韓国にも抜かれてしまいました。

日本は今失われた 20 年、30 年と言われていますが、なぜなのだろうと考えたときに、その大きな理由の一つに日本の人口の推移の影響が挙げられます。

データを見ていただきたいのですが、明治維新から急激に人口が増えています。平成 16 年、2004 年を境にして急激に下がっている。少子化が進んで、高齢化が進んでいるということですが、これは世界でも類を見ない。急激に人口が増えて、急激に人口が減っている国、日本は独特な国です。



出典：国土政策部会「国土の長期展望」中間とりまとめ

われわれが生きていた時代とこれから生きていく子どもたちの時代は、完全にいままで日本が経験したことがない時代を生きていく。

これはどんな時代なのか、簡単に説明している人がいます。僕の友人で北海道にある会社、植松電機の社長の植松努さんという方です。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、この方は本業のほかにとっても有名な活動をしています。それは宇宙開発です。自前で人工衛星をつくったり、ロケットを飛ばしたりします。この会社を宇宙開発で有名にした象徴的な実験装置があります。無重力の状態をつくり出す実験装置です。なんとこれを自社で開発したのですが、これは世界に三つしかありません。アメリカのNASAとドイツの大学、そして植松電機です。日本のJAXAも常にここで実験をしているそうです。

その植松さんがこのように言っています。人口が増えている時代は、ものをつくってもつくってもどんどん売れる。日本は確かに優秀だったかもしれないけれど、人口が増えているときは成功したビジネスモデルをまねをすればいい。のれん分けみたいな手法です。だれかが成功したビジネスモデルをまねすればよかった時代が、人口が急激に増えている時代です。でもいまは人口が急激に減り始めています。購買力が下がります。つくってもつくっても売れない時代になっている。国内で売ろうとどう頑張っても売れない。そうするとどうしても仕事を安く引き受けないといけない。当然労働環境が悪化する。賃金が下がる。購買力が下がる。悪循環になる。これがいまの日本の状況です。ではそんな時代にどうすればいいのか。競合相手がやらない仕事、植松さんはそれを見事にやってのけた。そうすると、人がやりたがらない仕事に目をつけて、人に役に立つものを、採算のとれるかたちにしていく。そういったことが大事です。

どうも我々は子どもたちに従来のビジネスモデルが通用しない時代を生きてくれということなのです。当然子どもたちの時代は一つの会社に就職して定年までということは特別な仕事につかない限りありえない時代です。そんな時代を子どもたちは生きていくことになります。ですからどうも今までの時代よりも教育の本質が問われる時代です。ますます自己決定が必要であり、社会の中で起こるいろいろな対立やジレンマをそのまま受け入れて、それを対話を通してどう解決するか、それが求められる時代に変わった。にもかかわらず日本の教育界は相変わらずこればかりが目立つ。これはOECDの調査ですが、15歳の時点での世界の学力を示したもの

です。一番左に、読解リテラシーがちょっと下がっていますが、ICT を使うテストになったので下がったといわれていますが、日本はずっと昔から常にトップクラスで、いまだにトップクラスです。学力はほとんど下がっていません。これをもって日本の教育はまんざらでもないと言われている教育者の方々は言います。僕はまったく的外れだと思います。

それを示す三つの調査がありますので紹介します。まず一つ目、日本財団の18歳意識調査、主に高校三年生1000名を抽出した世界9カ国の調査です。17～19歳、日本、インド、インドネシア、韓国、ベトナム、中国のアジアと、イギリス、アメリカ、ドイツ。質問は六つ、国や社会に対する意識調査です。一つ目、自分は大人だと思いますか。29.1%。比較的似ている教育をしているといわれている韓国と比べても低い。二つ目、自分が責任ある社会の一員だと思いますか。断トツ低い。三つ目、将来の夢。四つ目、自分で国や社会を変えられると思いますかという質問に対しては18.3%。最後の二つ目も当てられません。自分の国に解決したい課題があるか議論していますか。この調査結果ですが、2年前ぐらいに出されたときに、僕は経団連に頼まれて企業のトップの方々に講演をしたことがあります。皆さんがこの調査結果を見て日本はどうなっちゃったのかととても憂っていました。もしこの調査結果が日本中の高校3年生の姿を象徴しているものだとすると、日本の未来はとても暗いことになります。

2年経って3月に新しい調査の結果が出ました。同じ日本財団が行った調査です。一つ目の自分は大人だと思いますか、ますます下がっています。自分が責任ある社会の一員だと思いますか、これは少し上がっていますが、やはり傾向は同じです。自分の行動で国や社会を変えられると思いますか、これも少し数字は上がっていますが、傾向はまったく変わらない。これが一つ目の調査です。

二つ目の調査も深刻な調査です。世界38カ国の子どもたちを対象に幸福度をいろいろな項目で調査したものです。総合順位は38カ国中20位。でも目立つ項目があります。一つは身体的な健康、発育、そういったものは世界第1位。望ましいことです。にもかかわらず心の幸福度は下から2番目です。もう1種類の調査、自己肯定感が非常に低い。自分はダメだと、そういう結果が出ています。

自身について

日本は、いずれの項目においても9カ国の中で他の国に差をつけて最下位となった。

Q1 あなた自身について、お答えください。（各国n=1000）
 ※各設問「はい」回答者割合

	自分を大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	将来の夢を持っている	自分で国や社会を変えられると思う	自分の国に解決したい社会課題がある	社会課題について、高校や友人など周りの人と積極的に議論している
日本 (n=1000)	29.1%	44.8	60.1	19.2%	46.4	27.2%
インド (n=1000)	84.1	92.0	95.8	83.4	89.1	83.8
インドネシア (n=1000)	79.4	88.0	97.0	68.2	74.6	79.1
韓国 (n=1000)	49.1	74.0	82.2	39.6	71.6	55.0
ベトナム (n=1000)	65.3	84.8	92.4	47.0	75.5	75.3
中国 (n=1000)	89.9	96.5	96.0	65.6	73.4	87.7
イギリス (n=1000)	82.2	89.8	91.1	60.7	78.0	74.5
アメリカ (n=1000)	78.1	88.0	93.7	65.7	79.4	68.4
ドイツ (n=1000)	82.6	83.4	92.4	45.9	66.2	73.1

出典：2019年 日本財団 「18歳意識調査」

自身と社会の関わりについて 1/2

自身と社会の関わりについて、以下の全ての項目で日本は6カ国中最下位となった。特に「自分は大人だと思う」「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」がそれぞれ3割に満たず、他の国に差をつけて低い。

Q 以下の項目に同意しますか。（各国n=1000）

※「はい」回答率を掲載

(単位: %)	自分は大人だと思う	自分は責任がある社会の一員だと思う	自分の行動で、国や社会を変えられると思う	国や社会に役立つことをしたいと思う	慈善活動のために寄付をしたい	ボランティア活動に参加したい
日本	27.3 6位	48.4 6位	26.9 6位	61.7 6位	36.2 6位	49.7 6位
アメリカ	85.7	77.1	58.5	73.0	66.7	70.4
イギリス	85.9 1位	79.9	50.6	71.2	69.5	64.2
中国	71.0	77.1	70.9	82.1	78.9	85.3 1位
韓国	46.7	65.7	61.5	75.2	62.4	70.7
インド	83.7	82.8 1位	78.9 1位	92.6 1位	83.7 1位	78.1

出典：2022年 日本財団「18歳意識調査」

国:

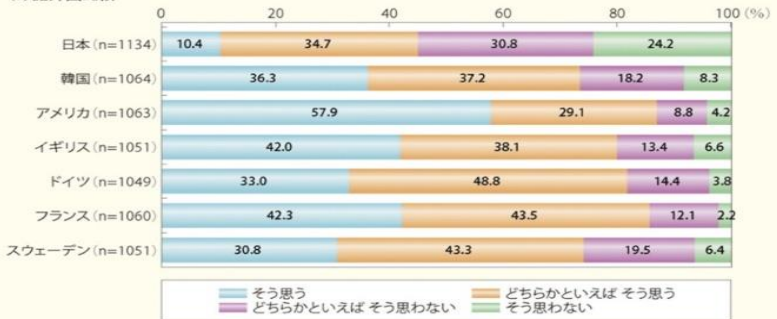
日本



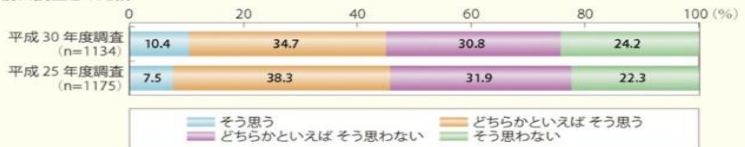
、 出典：ユニセフ レポートカード16 2020年6月

図表3 自分自身に満足している

(a) 諸外国比較



(b) 前回調査との比較



出典：内閣府「我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」2018年

日本という国は、学力、学力と言っているうちに最も失ってはいけない大事なものを失ってしまったと僕は思っています。なぜそうなったのか。一言で言うと大人も含めて、われわれは人に対してサービスを求めるようになってしまった。与えられることに慣れてしまった。人は与えられることに慣れていくと、もっといいサービスを、もっといいサービスを。いま情報化社会なので、いとも簡単にいろいろなところの情報が入ります。比較をして不幸になる。もっと要求をする。教育の世界に置き換えるともっとわかりやすい。教育がいまの社会をつくっているのですから、教育がというと、僕の二人の息子たちの父親ですから、当然親の気持ちとしては少しでもいい教育環境を与えたいと手をかけたくくなります。もともと子どもは主体的な生き物です。赤ちゃんのときは自分のやりたいことしかやらない。でもだんだん大人が心配して手をかければ手をかけるほど、あれをしなさい、これをしなさい、あれをやめなさい、これをやめなさいと言っているうちに子どもはだんだん物事を考えなくなります。

こういった自律できなくなった子どもの特徴があります。うまくいかないことがあると必ず人のせいにする。勉強がわからないと先生の教え方が悪いと言う。クラスがうまくいかないと担任がはずれだと言います。麴町中に入ってくる1年生の多くはまさにこういう子どもたちです。1年生は毎年のように学級崩壊しました。僕が行った1年目、4学級中2学級です。2年目も4学級中2学級が学級崩壊しました。3年目は4学級中3学級が学級崩壊しました。わずか12歳の子どもの中にも、僕はだめですと劣等感でいっぱい、いじめをしたり、学校を破壊したり、授業中抜け出したり、立ち歩いたり伏せていたり、そんな子どもたちがいます。その子どもたちを約1年かけてリハビリしていくのですが、なかなかうまくいきませんでした。

そこで、さまざまな教育システムの改革・改善を行っていったのですが、その中の一つが全員担任制です。可能限り自分で選び、決定するという主体的な方向に教育を転換をしていきました。

いじめ問題も毎年のように話題になりますが、いじめの問題は、いつの間にか大人の問題にすり替わってしまいました。簡単に言えば、いじめが解決できないのは学校が悪いということになっています。

いじめの問題を解決するのは、本当は子ども自身です。ですから子ども自身の解決する力を上げなければいけないのですが、大人が解決するもの

だと思ってしまった子どもたちは解決能力を失います。ますます解決できない子どもたちができていくということです。そうなった原因はもちろんわれわれ大人にあります。残念ながら、よかれと思ってやっているわれわれ学校関係者自身にあるのです。この問題を僕は教育の手段の目的化と言っています。このことについて構図を説明します。これは文部科学省が示している、この世の中をたくましく生きる力を育成するためには、確かな学力、豊かな人間性、体力・健康を、バランスよく育てる。いわゆる、知育・徳育・体育です。本来、これらは生きる力を育成することを実現するための手段のはずです。そのための学力であり、人間性であり、体力・健康なのですが、いつの間にか本当の目的を忘れてしまうのです。自分で考えて自分で行動する子どもにしなければいけないのに、学力をつけること、人間性をつけること、体力・健康をつけること自体が目標になってしまうのです。

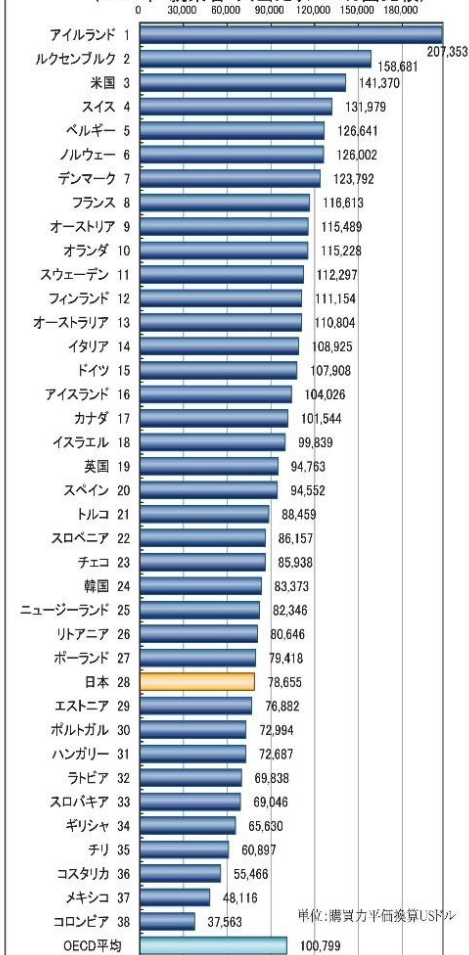
いくつか例を挙げると、まず学力です。日本は相変わらず大学入試制度改革ができない、世界の中では珍しい国です。1点でも点数を取ると大学に合格できるという制度をいまだに残しているわずかな国です。日本、韓国、中国ぐらいでしょうか。欧米は、得点は足きり程度で人物評価で合格を決めるという時代が変わっています。日本はいまだに点数ですから、学力を伸ばすやり方は簡単です。子どものつまずきを探して解消して定着させればいい。当然宿題も多くなる。手をかけて、手をかけて15歳レベルでは世界トップクラスです。でも大人になっていくと、たとえば大学の世界ランキングはどんどん下がっています。日本の大学の論文は世界の中でほとんど相手にされないみたいに言う人もいます。実はスポーツの世界もまったく同じだそうです。去年の末、僕は元オリンピック選手の為末さんとある企画で対談をさせてもらいました。為末さんがこんなふうに言いました。「工藤さん、日本は高校クラスまでは、実は団体競技も個人競技も世界トップクラスなんですよ。あまり知られていないですけど、ベスト5ぐらいに入るんですよ。でも大人になればなるほど引き離されていくんです」。「なぜだと思いますか」。一つは、自律していないということです。そして、とにかく練習量が多い。べらぼうに練習量が多くて高校生の練習時間は朝練あり、夜練あり、土日も休みなく徹底してコーチが繰り返し教える。世界の中でトップクラスの練習をしているので、当然この時点では世界でトップだ。でも大人になっていくとどんどん、どんどん下がっていく

んですよと。徳育も似たようなところがあります。挨拶が大事ということは言うまでもないことですし、とても日本的ですばらしいことの一つです。もちろん、僕もそう思います。でも発達に特性のあるお子さん、もともと広汎性発達障害といわれるコミュニケーションが苦手な子どもたちにとっては、それがなかなかできなかつたりします。ですから、極端に挨拶が大事だとやればやるほど、排除されていく子どもたちが出てくることにつながりかねません。

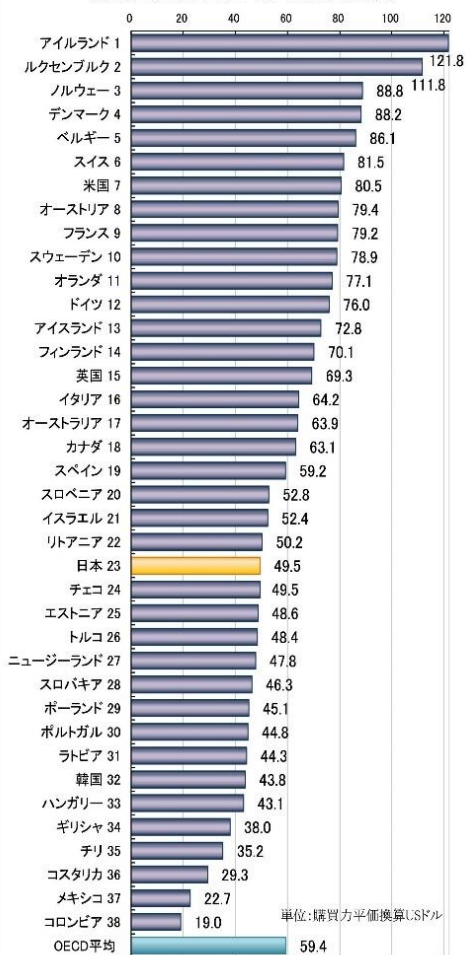
本当は自分で勉強できる子に育ててほしいのに、なぜか知らないけれど、勉強時間調査をする。これもとても日本的です。今日ここにお子さんをお持ちの方もいらっしゃると思いますが、自分の子どもが自宅で勉強しているか気になる。これも日本的です。ヨーロッパの中には宿題を出すことを法的に禁止している国もあります。塾もほとんどありません。でもなぜ大人になったときに、日本よりも勝負ができるのでしょうか。日本は指示されたことをこなしていくことが得意な子どもが育っている。小中高大と言われた宿題をやりこなす子どもです。日本の教育を考えると、日本の労働生産性が低いのは当たり前ではないかと僕は思います。最近では教員がブラック企業だと言われています。働く時間を短くして成果を上げろという時代に、先生たちは子どもたちにペーパーの学力を上げるために勉強時間を増やせと言っています。違いますよ。自分の頭で考えてやることを探さない。効率よく勉強する方法は自分でつくりなさいと言わなければいけないのに、日本はどうも勘違いしている。

ここにサッカーの写真があります。去年、元Jリーガーの選手が僕を訪ねてくれました。その選手は若いころサッカー留学をしていたのです。オランダのチーム、アヤックスの下部組織、子どものチームの練習を見て驚いた。コーチが10本ダッシュをしなさいと言うと、子どもたちは「なぜですか」と聞く。そうするとコーチは答えます。「サッカーはね、長丁場の試合だから後半バテバテになる。そのときにディフェンスもオフェンスもスピードが大事だ。だからそのスピードを鍛えなさい」と教える。10本やるのが目的ではなくて、全速力で走ることが大切だと子どもたちは知ることができます。日本の子どもたちは腹筋100回、背筋100回、ダッシュ10本ねと言われたら、それをやるのが目的だったりします。中にはけがをしているのに無理をしてやります。一人ひとりの状況はまったく違うのに、同じ練習を繰り返すことが目的になったりします。

(図3)OECD加盟諸国の労働生産性
(2020年・就業者1人当たり/38カ国比較)



(図7)OECD加盟諸国の時間当たり
労働生産性(2020年/38カ国比較)



出典：公益財団法人 日本生産性本部 「労働生産性の国際比較 2021」

日本は働き方改革と言われて久しいですが、どんどん、どんどんいまだに下がっています。1970年以降、日本の労働生産性は最低になっています。目標にしているドイツは6割、7割、生産性を上げる。教育もヨーロッパなどは30年ぐらい前から転換しています。教え込むのではなくて子どもが学ぶ方法に。

日本は教師の立場から明治維新以降、ずっと何を、どう教えるのかを研究してきました。一斉授業のなかでどう効率的に教えるかということ。当然、規律が重要になります。いまでは幼稚園でもとても規律を大事にしているところがあります。

イギリスとアメリカの学校の授業を僕も実際に見たことがあるのですが、小学校では黒板を前にして授業をするなんてほとんどありません。イギリスなどは先生が黒板にほとんど書かなかった。小さいホワイトボードがあるだけでした。教え込む授業がほとんどないんです。

これからの時代は何を学んで、どう学ぶか、子どもが選べる仕組みに転換していくということが大事です。

一人の学び方の例を挙げたいと思います。これは僕の知り合いの教育関係者の小学校5年生の息子さんです。夏と冬で降水量が逆なのはなぜか考えようという1時間の授業があったのですが、彼は先生が書いた板書をたった2行しか写せませんでした。季節風、季節によって決まった方向に吹く風のこと。なぜ彼は書けなかったかということ、字を書くのが極端に苦手だからです。同じ特徴を持った人にこういう人たちがいます。スピルバーグとトム・クルーズです。お二人とも、読み書きが苦手です。トム・クルーズは有名な役者さんですが、台本が読めないんですね。でも困ったことはありません。台本を録音していたからです。いまではたぶんスマホ一つあれば読み上げソフトもあるし、音声入力もできます。

でも、日本では一斉授業が通常のスタイルですから、黒板の字を写しなさいと言われると、こうした子にとってはきついです。ヨーロッパの調査では、こういった特徴のあるお子さんは20%ぐらいいると言われています。日本でも肌感覚では10%ぐらいはいます。こういうお子さんたちはとても苦労します。この子も校長先生に相談しました。ノートを取るのをやめようかと。でも鉛筆ではなくてキーボードを打つとノートをとれることがあるよ、違う脳の回路だからね。やってみました。彼は数日後、パソコンでノートが普通に取れたのです。驚きました。半年たった彼のノートがこれ

です。大人のノートと同じです。

日本の特別支援は学校に適応させようとしします。でも欧米の特別支援は世の中にこの子がどんな姿で生きるかを逆算して授業スタイルを考えます。一斉教授型の授業スタイルではこういった子どもたちはほとんど取り残されていきます。麹町中や横浜創英の数学の教え方をご紹介します。こんな姿です。教えるから学ぶ、学び方は自由です。決して黙々と孤独に勉強しているわけではありません。友だち同士相談したり、先生を呼んだりします。

一斉授業では、数学が得意な子は塾などで習っているのでもう知っている内容を授業中 50 分ぐらいつと我慢して聴いています。逆に苦手な子どもは授業から置いていかれます。そして、子どもたちは、先生の教え方がわかりづらいと先生の批判ばかり言います。でも横浜創英や麹町中が行っている自ら学ぶ授業スタイルでは、そもそも先生は教えないのですから、先生のせいにする子は一人もいません。それどころかまったく質問できなかった子が隣の子に質問してわかったと、このフィードバックに感動します。これは一生ものです。その後の人生で何回も繰り返すことができるようになります。友だちに聞いて友だちもわからなかった。でも友だちの友だちを呼んでと人脈をつくることを覚えたりします。これが学ぶ力です。自分が学ぶことを覚えた子どもと人に学ばせてもらうことを考えている子どもではまったく違う。自律型の教育、これがいま日本に求められているということです。人のせいにしない子どもたちを育成する、学び方を覚えた子どもを育てることがこれからの課題だということです。

日本はもしかすると国ぐるみで学校教育の最上位の目的を全員で合意したことの無い国だと思えます。

あえて言えば、これは教育基本法です。第一条、これは平成18年に改正されたのですが、残っている言葉でこの黄色の部分です。「人格の完成を目指し」とあります。教育立国と言われているヨーロッパの国々を見ると、この書きぶりが違います。教育は大人が勝手に人格の形成を目指すものではなくて、子ども自身が自分で幸せになっていく力を育成するものだと、そういうことが明記されている国もあります。

最後の言葉もすごく気になっています。これは文科省の役人さんもよく言います。「心身ともに健康な国民の育成を期して行う」とありますけれども、発達障害の子も含めて生まれながらに障害を持って生まれてくる子ども

います。途中で病気になる子もいます。心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければいけないというのは、僕はここから日本の教育は書き直す必要があるのではないかと考えています。

改正前後の教育基本法の比較

(※下線部・枠囲いは主な変更箇所)

改正後の教育基本法 (平成18年法律第120号)	改正前の教育基本法 (昭和22年法律第25号)
<p>前文</p> <p>我々日本国民は、たゆまぬ努力によって築いてきた民主的で文化的な国家を更に発展させるとともに、世界の平和と人類の福祉の向上に貢献することを願うものである。</p> <p>我々は、この理想を実現するため、個人の尊厳を重んじ、真理と正義を希求し、<u>公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、<u>伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する。</u></u></p> <p>ここに、我々は、日本国憲法の精神にのっとり、我が国の<u>未来を切り拓く</u>教育の基本を確立し、その振興を図るため、この法律を制定する。</p> <p>第一章 教育の目的及び理念</p> <p>(教育の目的)</p> <p>第一条 教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。</p>	<p>前文</p> <p>われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。</p> <p>われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。</p> <p>ここに、日本国憲法の精神に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。</p> <p>第一条 (教育の目的) 教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。</p>

出典：文部科学省「改正教育基本法」資料

パネルディスカッション

コーディネーター

竹花 豊 おやじ日本理事長 元東京都副知事
広島県警本部長時代には暴走族問題に取り組み、
大きな成果を上げる。東京都副知事に就任後は、
「歌舞伎町浄化作戦」の総指揮、都の青少年健全
育成条例の改正などを行ない、一貫して青少年の
非行防止、健全育成に関わっている。現在、地域
において学校と連携しながら子どもを育てるおや
じの会を支援する「認定特定非営利活動法人おや
じ日本」の理事長等を務める。
著書『子どもたちを救おう』（幻冬舎）

パネリスト

長谷川眞理子氏 総合研究大学院大学学長
進化生物学者 専門は行動生態学、自然人類学。
イェール大学人類学部客員准教授、早稲田大学教授などを経て現職。

『進化とはなんだろうか』(岩波ジュニア新書)、
『ダーウィンの足跡を訪ねて』(集英社)など著書多数。

訳書『人間の進化と性淘汰 (I・II)』(チャールズ・ダーウィン著、文一総合出版)、
『ダーウィンの『種の起源』』(ジャネット・ブラウン著、ポプラ社)など多数。

工藤勇一氏 横浜創英中学・高等学校長
(プロフィール p 3 掲載)

布村幸彦 おやじ日本理事

元文部科学省初等中等教育局長
2009 年スポーツ青少年教育局長としてスポーツ振興や体験活動を推進。2012 年初等中等教育局長として幼稚園から高校までの学力向上やいじめ問題に、高等教育局長として大学改革や飛び立て留学ジャパンなどに取り組む。2014 年 1 月から東京五輪パラリンピック組織委員会の副事務総長として東京大会開催に従事。

村内敦 おやじ日本理事

オール世田谷おやじの会会長
世田谷区社会教育委員。震災等の地域の一大事のために、地域コミュニティー活性化を推進するオール世田谷おやじの会の活動を「希望の光」と評価され東京オリンピック聖火ランナーに選出された経緯を持つ。

社会・文化的環境と日本の子どもたち

竹花 まずお三人のそれぞれの立場でいまの工藤先生の基調講演に対するご感想でも、ご自身のご経験から今日の課題について思うところをお述べただけであればと思います。

長谷川 全面的に賛成です。今の日本の状況がどういうふうにもまずいかということの一つのデータをお見せしたいと思います。

子どもたちがどう育っていくかということは、子どもたちを取り巻いている社会、その文化が子どもたちにとって一番の大きな環境です。どういう社会・文化の中に生まれこんでくるかということ子どもたちは選べないので、大人たちがどういう社会・文化をつくっているかということがすごく大事です。それこそが個人を取り巻く最も重要な環境です。それが何かちょっとまずいのではないかと、工藤先生のいろいろな指摘があったと思います。

亡くなられた山岸俊男先生はいい友だちで仲間、同志でした。その先生が最後のほうにおやりになった研究をちょっと紹介したいと思います。

鈴木さんという方と山岸先生が 2004 年にやった調査ですが、日本人の大学生ににせの知能テストを受けさせて、そのあと「あなたは自分で大学全体の平均よりも高かったと思うか、低かったと思う」と聞きます。そうするとまったく匿名でやっているにもかかわらずなんと 72%が「僕は平均より低かったと思う」と答えました。ところが同じテストのあと「もしあなた自身の判断が本当に当たっていたら 100 円あげます」とボーナス条件を出します。そうするとなんと 69%が「僕は平均より高かったと思う」と答える。平均ですから 50%が上で 50%が下なので、72%が低いわけがなく、同時に 69%が平均より上のわけがない。

条件が何もないとどういう状況かわからないので、文化的に、社会的に期待されていると思われる「私は平均よりできていない」という答えをする。けれど、ボーナス条件のインセンティブがつくと、「自分は本当にできていると思う」という評価をちゃんと表明しました。

それでもっと大がかりな調査をして、何も条件でちゃんとできたと思いますかと、そのあともし当たっていたら 300 円あげますよという、二つの条件でやってみました。そうすると 2 種類の同じテストをやったのですが、何もコントロールがないと 36%と 19%の人しか平均以上だったと

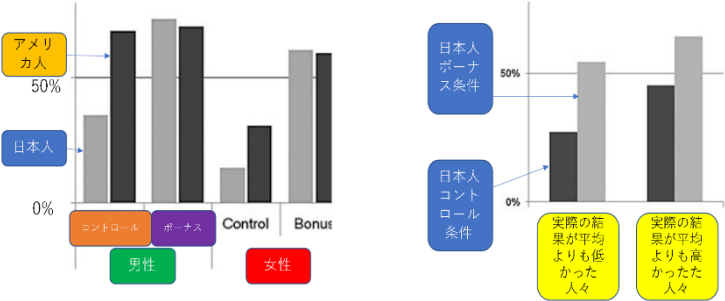
言わなかったのが、300円あげますと言うと59%と62%の人が平均より上だったと思うと言いました。子どももきっとそうだと思うのです。いまのこの大人の社会というのは、よくわからないときには自分はだめなんですと言ったほうが良い社会だということを示しています(図1)。

図1 平均以上だと答えた割合

テストの種類	コントロール条件	ボーナス条件
隠し絵テスト	36%	59%
信頼度判定	19%	62%

Yamagishi et al., 2012

図2 それぞれの条件で「平均以上だ」と表明した人々の割合



アメリカでも、女性は謙遜を強いられている
日本人女性の「謙遜」を顔面通りに受け取ってはいけない！！

アメリカはだいぶ違うので、アメリカ人にも同じことをやってもらいました。アメリカ人はボーナス条件が何もないのと、15ドルもらえるというボーナス条件付きの質問です。そうすると、グラフのとおりアメリカ人の男性は何もなかりうが、15ドルもらえようが平均より高かったと言う人が多いのです。だからアメリカの男性は黙っていても自分はできると言うのが文化なのです（図2）。

日本人は何もないとき男性はかなりの人が自分はだめなんですと言うのですが、もらえるとなるとすごく上がって、その差はアメリカの男性と変わらない。ですから本当に自分を正直に表明したほうが得になると思ったときには、日本人の男性はアメリカ人の男性と変わらず自信を持って何か言っているということがわかります。

女性に関しては、アメリカ人の女性もボーナス条件が何もないと日本人の男性より低かったりします。ということは、アメリカの女性も人前では自分ができると言わないほうがいいという文化で育っている。だけどアメリカの女性もお金がもらえるとガーッと上がる。ということは、自分が得になると思ったらちゃんと自分のことを言う。

日本人は、すごくその差がひどく、自分自身の成績が平均より低かった人も高かった人も半々いるわけですが、どちらのグループの人でも何もボーナス条件がないときにはみんなだめなんですと言う。だけどお金がもらえとかボーナス条件がつくとガーッと上がる。ということは、何と言っても人前ではだめなんですと言い続けなければいけない日本人、だけど本心はそうではなくて自己評価も高かったりする。そういうことにはまったく関係ないのがアメリカの男性で、アメリカの女性も結構そのような文化で暮らさせられているんだということがわかります。

だから日本人の女性の謙遜を額面通りに受け取ってはいけな。コントロールのところであんなにバーが低いけれども、ボーナス条件があるとガーッと上がるというのは本当のことを言ってもいいんですよとなったら、日本人の女性も半分以上の人が平均より上だと思っているのですから、額面通りに謙遜を受け取らないでください。でも言ったようにアメリカですら、あの自由な国ですら女性は結構謙遜を強いられているのです。

私はどういうふうになんが行動するかということを社会・文化環境がものすごく決めていると思うので、これは周りが変われば変わる。でもその周りを変わらせることが非常に大変。日本では周囲を見て、自分が思っ

ていることや考えていることを何でも勝手に言っではいけないなと思われる社会は変わりにくい。たとえ多くの人がこれは良くないねとかこれはそうじゃないねと思っていても、それを言わないほうがいいと思ったら、社会の変化速度はとて遅くなると思います。

ただしちょっときっかけがあつてドドッと変わったら、本当にそう思っていない人もドドッとそっちに行ってしまうという怖いことになることもある。

だから普段変えたいと思っている人とか、これはまずいと思っている人も、それをそのまま言っではいけないとずっと思い続けているというのが社会の変化速度をすごく遅くしている。だけど何らかのきっかけでどちらかに振れたときには、ドドッとなだれをうってとなってしまうと怖いですねと、そういう社会なのかなという気がしました。

竹花 長谷川先生のお話の中で謙遜という言葉が出てきました。先ほどの工藤先生から自分を評価する、自己肯定感が日本の子どもたちには少ないのではないかというお話がありましたが、それを謙遜と見るべきなのか、それとも本当に自己肯定感が少ないと見るべきなのか、先生はどのようにお感じになりますか。

長谷川 自己肯定感も、それを本当に表明してみんなから賞賛を受ければ、本物の自己肯定感になります。だけどデータが示しているのは、たとえば自分ができていると思っている人もできていると言わないで、いやいや、できません、できませんと言う。ということは周りもそういうふうに反応するわけです。心の奥底で、いや、実はできるんだけどねと思いがながらも自己肯定感とは言えないのではないかという気がします、いかがでしょうか。

竹花 先生のお話だと自分は、本当はもう少しできるんだよと思っても、それを表現しないということなんですね。だから内心の上では自己肯定感はそのところにあるんだよというふうに受け止めればいいのか、そこらへんは。

長谷川 あるんだけど、相手からの反応がそう言わないわけだから違っているわけでしょう。だから違った結果になると思うんですけど。

竹花 工藤先生はそのへんどう思われますか。

工藤 僕の感じ方としては、僕が教員をやっていたころの子どもたちはまだそんな感じがしました。でもいまの子どもたちは全然違うと思います。

僕は麴町中で教育をいろいろ転換していくときに教員たちは目の前にいる劣等感でいっぱい、やる気をなくして、僕なんかだめですと言う子どもたちの主体性を取り戻すのにもすごく苦勞していました。たとえば授業中、飛び出していった子への対応です。「何をやっているんだ。教室に戻れ」と毅然として叱るのがいままでの日本的な教育だと思うのですが、この指導では子どもは立ち直れません。そのほざまで教員たちは悩んだんです。

そこで麴町中では脳科学を研究しました。脳はいま本当に物理的にいろいろわかっている時代になっています。一例を挙げると、挑戦して自己肯定感が高いのは失敗を恐れない子どもたちは、失敗してもオーケーよと言われる環境で育った子どもたちだということがわかっています。しかし残念ながら、いまの子どもたちは自己決定の機会が非常に少ない。

これも脳科学的に見ると、自己決定をするからこそ自己肯定感が高まるのであって、われわれの子ども時代は自己決定をする機会が多かったのですが、いまの子どもたちは自己決定をすることを非常に恐れている。よく自己肯定感を高めるためにはほめる教育が大事だと言う人がいますが、僕は半分も当たっていないと思います。ほめて自己肯定感が高まるものではない。自己肯定感が高い子は自己決定をして、自分で試行錯誤をして、その結果をもとにまた新たな挑戦をして積み上げていく。つまり自分で自分をほめることができる子は自己肯定感が非常に高いのです。

竹花 工藤先生の先ほどのお話の中に、麴町中学の子どもたちは塾に通って、私立中学に行こうとして失敗をして行けなかった子どもたちで、自信をなくしている子どもたちがたくさん来ている学校だというお話がありました。いま私が思いますのは、いい中学に行って、いい高校に行って、いい大学に行って、いいところに就職するという、親のだれもが考えるようなレールから少し外れるということは、その子どもたちが人生のレールから少し外れてしまう。要するに一段、二段落ちた人生を歩んでいくことを自覚させられる過程があるような気がしてなりません。

それは偏差値ということでも表れるわけです。あるいは通信簿があります。できない子はいつも5段階の1か2です。あれはお前はできないんだ、できないんだと言われ続けていることになりますから、それは劣等感を持つことは当たり前で、そういう劣等感満載の子どもがたくさんいて、他方でまあまあそこそこに俺はやれるぞと思っているけれどそれは表面に出

したくないという子どもたちもたくさんいる。そんな感じではないかと僕は思いますが、先生はいかがでしょう。

長谷川 確かに、最近の世の中では、子どもの受験競争などが以前よりも強くなっていると思います。ですから、山岸先生たちが実験をされたときよりも、本当に自己肯定感を持ってない子どもが増えているのでしょうか。一元尺度で人生全体を判定してしまうようなことがそもそも大間違いだと私は思います。何かで一元尺度の1から10の評価をすることをなくすわけにはいかないかもしれないけれど、それだけが人間の判定とか人生ではないことを発信をしていかないといけないと思います。

それとは別に、私が今日話をしたかったのは、すごく周りの目とか、周りに対してどう反応しないといけないとあらかじめこっちが忖度するというような社会は、ものすごく本音が出にくいので、変わりにくいだろう。それを強調したかったのです。

文部科学省の問題意識と取り組み

竹花 布村さんは、元文部科学省初等中等教育局長という大変な役職にいらして、いま工藤先生を含めておっしゃられているように日本の子どもたちが自己肯定感が低いのではないかというのは、どうも実際にそうではないかとも思われるのですけれども、そういうふうにしてしまったのはあなたが悪いからではありませんか。

布村 竹花理事長から強烈なパンチをいただき、工藤先生からも自律をキーワードに学校教育の大きな方向転換をする、そういう流れが大事なことだと自覚を今しっかりいただきまして、そういう流れが一緒になってつくればよいと思います。

自己肯定感の問題は、現役時代、文科省にいた時代からわれわれも課題意識として持っていました。最初に国際学力調査などで出たときには、非常に日本人らしい謙遜からこういうデータかなと受け止めてコメントしたりしたことがありますが、なかなか改善しない。そこで学校教育で取り組んだところでは道德教育が一つ、それから体験の風を起こそうということで社会も一緒になってできるだけ体験活動を子どもたちに提供できるように取り組みました。

道德教育ではなかなか子どもたちの心に届かないということもあった

ので、たとえば「心のノート」をつくって、子どもたちに行動するきっかけ、考えるきっかけになるような、道徳も子どもたちの心にできるだけ届くような教材をつくってみようという取り組みをしたりしました。

また、子どもたちが様々な体験活動をしてそれを経験化して自分のものとしていく、それを支える「体験の風を起こそうキャンペーン」を国立青少年教育機構と一緒にになって取り組んだこともありました。その結論は、平成 19 年に出た中教審の答申だったのですが、体験活動を大人がする、見守る、支える、そういった活動、取り組みをして子どもたちがさまざまな体験をして、それを経験化できるような見守り、育むものです。丁度、おやじ日本でも見守り活動 83 運動とか、職場体験の未来教室もそのころ一緒に取り組んできた流れがありました。

しかしなかなかデータとしては変わってこないということで、工藤先生がおっしゃったとおり、自分で選択をして、自分で責任を持って行く、そういう生き方を積み上げていかなければいけない、それを大人一人ひとりが働きかけていかななくてはならないという問題提起はそのとおりだと思いました。

20 年来ずっと一緒に文科行政をやってきていただいた梶田叡一先生、当時は兵庫教育大学学長で中教審の中心メンバーで、平成に入った頃「生きる力」をキーワードに掲げました。最近の著書「人間教育の道」で拝読したのですが、「生きる力」を「我々の世界を生きる力」と「我的世界を生きる力」に分けて考えてみると、この変化の激しい社会に必要な資質能力を高めるといふ前者の「生きる力」にウエイトをかけすぎてしまったのではないかと振り返られ、今まで以上に一人ひとりの子どもたちが自分の世界、自己を確立することへのサポート、いわゆる自律への支援に注力すべきだったと語っておられ、私も強く共感しました。

そのための手法として、一つは自己内対話、自分を振り返って改善していくということで、自分の中での PDCA サイクルをつくりあげていくにあたって、たとえば日記を書いて振り返る、それに対して保護者や教師がアドバイスをする。スポーツでも大谷翔平さんが自分の記録、毎日毎日の反省点、あるいはここを伸ばしたいということをノートに記して、親やコーチがサポートをする。そういう自分を確立する自律に向けての働きかけに教師なり親なり周りの大人なりがもう少し意識して子どもたちとの接し方を変えなければいけないと、そんな反省も芽生えています。

竹花 工藤先生のお話の中に、教育ばかりではないのでしょうか、大人社会の子どもたちに対する向き合い方として与え続けることが子どもたちの自律を阻んでいるかなり大きな要素ではないか。それは学校教育現場でも似たようなことがあるという指摘がありましたが、文部科学行政をやっていくうえで、そういう視点、要するにかまひすぎの文化、過保護の文化を教育の世界から取り除くべきだということたちで対応されたことはおありでしょうか。

布村 行政は学校を支える役割ですが、むしろ学力の問題が起きた時には教育内容の基準である学習指導要領を、従前の、教える内容を学校が選択できる幅を持ったものから、これだけは必ず教えてほしい、という最低基準にその形を見直して学力の底上げを図ろうとしました。

いじめの問題も工藤先生もおっしゃいましたが、本来子どもの世界の問題だったのですが、自殺までつながっていくと、これは大人として、あるいは学校として何かしなければいけないのではないかと、そういったことで議員立法で法律ができ、いじめの対処基本方針を作って、学校のほうでもぜひやってくださいと、そういう流れで、学校の自由度を高めるというよりは最低限こういうことはやって社会の期待に応えましょうとそういう手法に変わりました。

学力の問題はいまのところは一定の成果にはつながっているかとは思いますが、いじめの問題はなかなか根本的な解決にはつながっていない。そういう問題意識がありますので、学校がどうぞ自由にやりたいようにやってくださいという言い方は、小中高の段階ではあまり言っていないかもしれませんが、大学教育はかえって言わなさすぎていたのかもしれませんが。そんな感覚ではあります。

家庭や地域での子育て

竹花 村内さん、子どもはあなたがいま会長を続けておられる世田谷おやじの会の皆さん方には大変お世話になってきたという思いもありますし、大変立派な活動をしておられることに敬意を表しているのですが、そのおやじの会の皆さん方は、この問題に対してどんな考えをお持ちでしょうか。具体的に言えば、やっぱり皆さん、自分の子どもを育てるときに、塾はどうでしょうか、中学校どうでしょうか、高校どうでしょうかというふうに

迷われる親御さんが多いのではないかと思うのですが、そういうことについて親御さんたちは、子どものことだから放っておこうと言う人もおられるかもしれないけれど、やはり結構心配して思い悩んでおられる方も多いと思うのですが、世田谷のお父さんたちはどんな状況ですか。

村内 私自身、女の子が2人いますが、2人とも塾に通わせて、私立の中学受験をさせて、中高一貫校に入れました。中学受験をするかどうかということで、一番最初に子どもの人生にとって大きな分岐点が来るという意識は、かなりおやじの中にはあって、それは自分たちの人生もそうだったからだと思います。受験をして、いい大学に入って一流企業に入れば安定した生活が送れて、それが幸せになるのだと、そういう思い込みというか、そういう社会だったし、自分もその中で育ってきたというのがやっぱり大きいかと思います。

実際に私の子どもの通っていた子どもたちの小学校でも私立受験をする割合は半分以上で、友だちが受験をするとなるとそれに引っ張り込まれるというか、じゃあ、私も塾に行きたいという流れが生まれて、必然的に受験をする。そこに受かるかどうかは別の問題ですが、受験する子どもたちが非常に多いというのが現状です。

ただおやじの会に集まってくるおやじたちに関して言うと、中学受験はだいたい小学校4年生ぐらいから塾に通いだして、勉強して受験するというパターンが多いのですが、それまでは子どもたちにいろいろな体験してほしいと思っているお父さんが非常に多くて、幼稚園、小学校の低学年ぐらいまでは、いろいろな自然体験や自分たちが経験してきた、これはおもしろいよということ子どもたちに体験してほしいと思っているお父さんたちが多い。

昨日もオール世田谷の情報交換会があり、特にこのコロナという状況でほぼ活動できていないところも多いのですが、活動しているところはびっくりするような活動をいろいろしています。たとえば今まで体験したことがないような、世田谷から羽田まで夜中に子どもたちと一緒に歩いて帰ってくるナイトウォークとか、雪合戦を真剣にお父さんと一緒にやろうとか、そういったいろいろな体験イベントをおやじの会の企画としてやっているところが非常に多くてびっくりします。「オール世田谷おやじの会」と検索していただくとホームページに情報が載っていますし、youtubeのオール世田谷おやじの会のページがありますので、機会があればぜひ見たい

だきたいと思います。

ネットを使った環境でコミュニケーションするというのがコロナ禍で当たり前になったことを踏まえて、ネット上のゲーム大会を企画したり、学校の運動会をスマホで動画を撮って配信したり、子どもたちのこの短い10年ぐらいの幼少の時間、幼稚園から小学校低学年ぐらいの時間をいかに有効に子どもたちと一緒に過ごすかということを考えているお父さんたちがいっぱいいます。

もう一つ、私も先ほどの18歳の子どもたちのアンケート調査を最初に見たときに驚愕の事実非常にびっくりしたのですが、でもよく考えると、これは「ザ・日本人」だとも思いました。自分も「お前は夢があるのか。お前は世の中を変えられると思っているのか」と問われると、18歳のときには全然思っていませんでした。しかも、人生100年時代と言われるようになって、私はいま50歳を過ぎていますが、あと50年あるかもしれないといったときに、「お前に夢はあるのか。世の中を変えられると思っているのか」と聞かれたら、果たして大人は答えられるでしょうか。大人の日本人のどれだけがこの18歳のデータを超えることができるでしょうか。非常に疑問に思います。

子どもたちは親の背中を見ているので親がそうでなければ、子どもがそう変わるわけがないと強く思っていて、お父さん自身が行動して背中を見せる、あきらめない姿勢を見せることが非常に大事で、夢を持って何かに取り組むことをどんどんやってみましょうと、オール世田谷ではお父さんたちに推奨しています。

オール世田谷では毎年ホールを借りてダンス、ブラスバンドなど子どもたちのいろいろな団体が発表するイベントを行っています。この2年間のコロナ禍で感染リスクもあるので中止にしようと思ったのですが、自分たちはいま何ができるのかを考え、安易にイベントを中止せず、感染症対策をしっかりして、どんなことが起こっても問題が起きないようにということに努力をすることでイベントあえてやって、子どもたちに発表の場をつくりました。

そうすると子どもたちはコロナ禍で練習もできないし、集まること自体がタブーだと言われてきたので、この発表の場がなければうちの団体は崩壊していたかもしれないとか、練習する機会もなく、練習すること自体がタブーだというコロナの状態でもこの発表の場があったからこそリモー

トや、何とかみんなで工夫して練習できて非常によかったというお声をいただいて、チャレンジしてよかったと思っています。

このステージの発表会は2年間とも行いました。いま子どもたちはそういった私たちの思いとかはわからないと思いますが、コロナの中、マスクをしながらどうしてステージで踊っている動画があるんだろうというのを大人になってから振り返ったときに、そのイベントを支えた保護者、われわれの意向を感じてくれればいいなと思っています。

海外の親たちは

竹花 たくさんのチャットが寄せられていますのでいくつか紹介をしたいと思います。どうも国民を育成せねばならないという考え方が強すぎるのではないかと、子どもは育つのに、育てるという気持ちが強すぎるのではないかというご意見。大人が自分で自律していないのに、あるいは対話を避けるし創造もしない、そういう大人社会を子どもたちは見ているのではないかという趣旨のご意見もあります。

実はおやじ日本も去年の大会以降、この問題について結構いろいろ勉強してきました。僕らがこんなこともあるのかと感じたことを紹介してみたいと思います。

日本で長く過ごしておられ、日本語が堪能なスウェーデンの実業家の方に直接お話を伺いました。いくつか見ていただきたいのですが、一番上です。

子ども自身が何をしたいのかが大事で、子どもが自分で道を選べばよいというのがスウェーデンの親の感覚。3~4歳ぐらいからずっとどんな仕事につきたいのかと子どもたちに問いかけ続けるが、最終的には子どもたちも自分で決めるものだと思っている。

親は子どもを成功させられる、幸福にできるという確信が持てないので子どもにあの仕事がいいとか、そのためにはこの学校に行けとか、余分なことは言わない。次の2段目の後段、日本のような学習塾もない、高校で勉強を頑張ってよい成績を取って社会に出ようぐらいの感覚。

日本の親はまるで手厚くビニールハウスで子どもを育てているようだ。スウェーデンでは、あなたはあなたで自分で何とかしなさいよという感じ。親も子どもを個人とみなして扱う。子どもが16歳になると親は教育の支

援をしない。以上のようなお話でした。

[スウェーデンの教育]

- 生き方のマニュアルがない現代は「人生にどう向き合うべきなのか」を教えないといけませんが、「学校が教えてくれるはずだ」と思われており、その期待に応えないと、学校、先生は無責任だと言われる。
- 学校の地域差(豊かである地域とそうでない地域)もあるが、選択肢は比較的多い。
- スウェーデン人の教育へのこだわりは日本人より低い。スウェーデンで「教育」が日常の話題に上ることはまずない。
- 子ども自身が何をしたいのかが大事で子どもが自分で道を選べば良いというのがスウェーデンの親の感覚。3、4歳くらいからずっと「どんな仕事に就きたいのか」と子ども達に問い続けており、子ども達も自分で決めるものだと思っている。

[スウェーデンの教育]・・・続き

- 親は「子どもを成功させられる」「幸福にできる」という確信が持てないので子どもに(「あの仕事が良い」「そのためにはこの学校行くべき」といった)余分なことは言わない。
- スウェーデンは社会福祉が充実しているので、食べられなくなる心配がない。最低限の生活は政府が面倒みてる前提であり、エリート意識を持つ子どもの話などは聞かない。日本のような学習塾もない。高校で勉強頑張って良い成績取って社会に出ようぐらいの感覚。
- グレタさんは両親の影響などもあったと思うが、北欧全体として、政治には皆、小学生の時から少なからず興味をもっており、「模擬政治」「模擬選挙」といった取り組みも小学5年生から行っている。

[スウェーデンの教育]・・・続き

- 日本の親はまるで「手厚いビニールハウスで子どもを育てている」ようであり、一方、スウェーデンでは「あなたはあなたで自分で何とかしなさいよ」という感じ。もう親も子どもを個人と見なして扱う。子どもが16歳になると親は教育の支援をしない。
- スウェーデンには(福祉制度、政治の短さ、キリスト教などの影響で)早く個が確立するシステムがあるのかも知れない。
- 学校への期待はあまりない。金儲け主義のフリースクール(日本などの私立学校や米国のチャータースクールのような公的支援・委託を受けた自由度のある学校)へ不満を言うことはあるが、学校に子どもの人間形成まで期待はしない。

Mr.Bong Wook LEE(韓国⇒米国⇒ドイツ⇒日本)&Dr.Kottmann
(ドイツ⇒日本)ご夫妻からのヒアリング(2021.12.18)概要

[子育て感]

- 子どもは二人おり現在、横浜独逸学校(インターナショナルスクール)に通わせている。使用言語は専らドイツ語。
- 正直、子どもを医者にしたいという思いはあるが、無用な圧力はかけないスタンス。基本は「やりたいこと好きなことを自分で見つけて行動してほしい」と思っている。
- 親として子どもには、「自分で好きなこと見つけて、それを続けて、人の役に立つ人間にさえなってくれば」と思う。
- 環境問題は、政府だけに求めるのではなく、みんなの問題である。子どもたちには、「そういう地球的課題を自分事として考え、解決しようとする取り組み人」、何より「自分を幸せにできる人」になって欲しい。

資料提供：坪田知広 (おやじ日本正会員 元文部科学省児童生徒課長)

先ほど工藤先生のお話の中にも中国の話が若干出てきましたが、中国は最近状況を大きく変えており、塾をやってはいけないうことになったそうです。

私立の学校もなくしてしまったそうです。その言い分として伝えられているのは、子どもは子どもらしく育つべきだ、そうしないと後々になって困ることになるというのが理由だそうです。そういうことが簡単にできる国ですから、日本で同じことをまねをする、それがいいと言うわけではありませんが、そういうふうにも子どもの成長についてはそれなりの関心を持って対応していることがうかがえます。

これも日本におられるドイツの方にお聞きしたのですが、ドイツは小学校を卒業する段階で、将来の行先、大学に行くのか、それとも職業に就いていくのか、大きな選択肢があるのだそうです。しかしこれは早すぎる選択ではないかと言われたり、いったん大学に行かないという選択をしたとしてももう一回やり直せるような道もつくろうという動きが出てきている。そういう教育のシステムの問題についても、やはりドイツでも同じようにいろいろな議論が、あまり大きくはないけれども起こりつつあるということです。

そのように諸外国でも子どもの成長の問題について、大人の向き合い方、教育のシステムについてもさまざまな工夫をしている状況にあることをご紹介しました。

これまでそれぞれのお立場で思っておられることを伺いましたが、それぞれのご発表についてお互いに何か聞いてみたいということがおありの方はいらっしゃいませんか。

いじめは子どもが自律を学ぶ機会

村内 先ほどの工藤先生のお話の中にいじめの問題は子どもの問題なのに大人の問題にすり替えているというお話がありましたが、保護者としても思うのですが、自分の子どもがいじめられているときに何とかしたい、何とかしてあげたいと当然思うと思うのですが、保護者として学校や、いろいろなところに相談して何とかならないかと、実際自分だったらいろいろ行動するだろうと思うのですが、先生のお考えとしては何かそこで解決策だったり、どうすべきなのかというようなお考えはあるのでしょうか。

工藤 先ほど村内さんのお話で、今のこんな状況の中でも子どもたちに体験活動をさせたいという強い思いがありました。それはたぶん大人たち

の当事者意識、主体性なのです。教育の基本はいまのコロナの状況でもこれを自分事として考えて人のせいにならないで何か自分で打ち破っていくかと、そういった視点でいくと日本はどうも違います。いつまでたっても同質性の中でわれわれは生きていて、他人の目が気になってなかなか変えられない。村内さんがおっしゃったように、日本全体、社会全体が当事者意識を失って主体性を失ってしまっている国なのかなと思います。

いじめの問題についてお話をしようと思います。トラブルは実は大事な自律の学びの機会です。日本は対立、トラブルを心の教育で解決しようとする、ちょっと乱暴な国です。思いやりの心で解決できると思っているのですが、実はそうではない。これを少し説明してみたいと思います。

実は違いを尊重するのはとても苦しいことで、日本ではもっとちゃんと教えなくてはいけないのは、みんな違っているのは、考え方が違うのだから当然対立が起きる。これは国際的で見れば当たり前です。文化も価値観の宗教もみんな違うのですから、当然対立が起こる。でも日本はその対立をなかなか整理できない。

対立を大きく三つに分けると、感情の対立、考え方の対立、利害の対立です。日本はどうしても感情の対立にこだわります。それはたぶん子どものころからみんな仲良く思いやりを持ってと言われるせいかもしれないのですが、大人を含めて一番嫌がるのが感情の対立です。でも本当は利害の対立を解決することが大事だと教えなくてはいけないのです。そのためには感情をコントロールして自分の考え方を修正しないと利害の対立は解決しないと子どものころから教えていくことが本当はすごく大事です。

子どものトラブルはだれが解決するのか。日頃から子どもたちが解決する習慣を身につけていけば大きなことにはなりません。確かに命を失ったり、自殺したりする子どもいるので、そのトラブルを全部ほったらかしで、子どもたちにすべて任せればいいわけではありません。では大人のありようはどうすべきなのか考えてみたいと思います。

一般的に、いまこんなことが日本の教育では行われています。たとえばA君とB君がある日殴り合いをした。B君に聞き取りをしてみたら、B君は「A君にずっと長い間いやがらせを受けてきた。今日という今日は頭にきて思わず殴ってしまった」。A君に聞き取りをしてみると、「B君は前々から嫌な奴で、いつも自分勝手に好き勝手なことを言っているから僕はずっと注意してきたんだ。それをB君は嫌がっている。それで今日あいつが

殴ってきたから俺は殴り返しただけなんだ」と。これはどこにでもある話ですが、ではどうやって解決するのか。

日本の場合、2人の間に先生が入って聞き取りをします。その結果、A君とB君はさっきのように言ったので、「B君、でもね、殴るのはダメよ」みたいに話します。A君には「いや、B君はずっと嫌がっていたのだから、そこは考えてあげなくちゃいけないんじゃないの」みたいな話をして、「じゃあ、二人で謝る機会をつくってあげるから謝りなさい」。こうということが日本の教室では行われます。

そうするとA君とB君はいやいや謝る。でも家に帰ってから本音が出ます。俺、本当は絶対許したくないのに先生が謝れと言ったから謝ったんだよと愚痴をこぼすと、親は学校は何をやっているんだと怒る。A君とB君のけんかなのにこういうことが起こる。当事者意識がまったく生まれない指導をしているので、逆に批判を生んで逆恨みされることがよく起きているのが今の日本の教育です。

ではどうすればいいのか。実は学校や親は警察署、裁判所になってはいけません。つまりジャッジをしてはいけません。トラブルに上手に子どもが当事者になるように通訳をしなくてはなりません。たとえば麹町中や横浜創英でやっている方法を紹介しますが、A君とB君は先ほどのように言いました。B君は、「いや、絶対許したくない。本当はもっと殴りたいんだ」と言ったとします。A君は「いや、俺もB君を絶対許したくない」と言っていることがわかった。そういう感情です。そのあと一つだけ質問をします。「B君、A君を許したくない気持ちもわかった。明日以降、この殴り合い、いがみ合いをB君はずっと続けたいのかい」と。そうすると考えてうえで、「もう続けるのはいやだ」とだいたい100%そう言います。今度はA君に同じ質問をすると、「僕もいやだ」と。

「実はB君にも同じ質問をしたんだけど、B君もいがみ合うのはいやだと言っている。でもA君のことを許したくないと言っている。だからA君もB君も明日からもいがみ合いをすることについては二人ともやりたくない都合できるんだね」と話をする。つまり利害の問題です。感情は許せないかもしれないけれど、明日以降対立をずっと続けて殴り合いをするのはいやだという利害関係については合意する。

合意すると初めて2人の心が変わります。B君も続けたくないと言っている。A君も続けたくないと思っている。でも感情を優先していくとこれ

は続くことはわかっている。謝るリスクとか、対話をするリスクと対話をしないリスクを天秤にかけて、二人は利害の対立に合意をする。つまり教員や親の仕事は当事者にすること、当事者としてその利害の対立を解決するためには感情を抑えて考え方を変えないとどうも解決できないということをお話していく作業です。

そうするとB君からあいつがここを謝ってくれたら、僕もここを謝るよねみたいなことがポロっと出ます。それをもってA君に伝えに行きます。A君からポロっと出たことをまたB君に伝えに行く。そうすると二人は「やっぱり話し合いをしようかな。先生、話し合いの場をつくってくれますか」、「ああいよいよ、言葉が足りなかったら先生が手助けするね」と。それで話し合って解決するわけです。感情は全然許していない。でも利害の対立のためにどうしなくてはいけないかということを決める子どもになる。

これはトラブルの解決の仕方だけを紹介しましたが、学校や親は対話を支援する、通訳をする役割なのです。日本では、こういった教育の支援技術みたいなものがまったく言語化されていない。いまの考え方は民主主義の考え方です。自分の自由だけを主張すると当然対立が起きる。でも相手の自由も尊重するためには何らか合意していなくてはならない。この市民教育が日本はまったく遅れている。言語化されていないために教育の中に技術がないのです。いまのはほんの一例ですが、こういったことを積み重ねていくことが僕は大事だと思っています。

長谷川 本当にそのとおりでと思います。先ほど紹介した山岸先生と私の対談でつくった本のタイトルが『きずなと思いやりが日本をダメにする』です。そういう何でも心の問題にして心を何とかすれば仲良くできると、これを山岸先生は「心でっかち」と呼んでいましたが、そうではなくて、何が争点になっているのか、互いに納得するところに落とし込むためには双方が何をしたらいいのかをちゃんと話し合う。そのためには、いやでも話はしなくてはならないのだとか、最終的に絶対合意はできなくて、じゃあもうさようならねということだって絶対あるとか、そういうことをちゃんと教えていないということはその本でも書きました。まったく同感です。

村内 大人としても胸が痛いという思いがして、そういう姿勢を自分が意識して子どもたちの前でそういう対応をいろいろな人にしなければいけないと感じました。

竹花 布村さん、教育現場でいじめは非常に大きな問題だということで文科省でもいろいろとお考えになってきたと思うのですが、いまの先生方のお話を聞いていると、いじめは大人が解決する、学校現場で解決するという大人の側の責任になっているような状況だと思います。いじめが起こったことで、それを解決するために子どもたちと一緒にやっていく、その中で子どもたちが成長していくという発想を持ってないのではないのでしょうか。学校現場はそれどころではない、世の中から非難をされてそれにもう辟易としているのがいまの学校現場の状況だと思うのですが、どんな感想をお持ちになりましたか。

布村 実際にいじめの問題が起きたときに、おっしゃったように冷静な対話を通して問題点を明確にする、感情をコントロールして考え方を変え、できるだけ利害の一致点を見出す、本当に現実的な対応だと思います。ただ実際、いじめの問題も自殺に至ったケースなどになると、どうしても警察には頼らざるをえない面はありますし、それ以前にマスコミからいろいろな取材が入って、学校でも対応しきれない、そこで教育委員会がサポートに入るかたちになってしまうのですが、その前の段階で子どもたちをしっかり対話ができるような工夫は確かに必要になると思います。

一方で、「心の教育」は非常に響きのいい言葉なので、いろいろな課題を解決するには政策としては打って出やすい面があり、結構自分では多用していたという反省をしていますけれども、そういう方向性とともにより具体的な手立てをもう少しわかりやすくお伝えできるほうがよかったのかなと思います。

変わりつつある学校教育

竹花 工藤先生がいま学校で取り組まれていること、そして大事にされているコンセプトは、僕は非常によくわかって将来の方向性を示しているものだと思いますが、先生がやっておられることは全国の学校に広がる可能性を持っているものなのではないでしょうか。チャットにも、何で麹町中での取り組みを全国の中学校がそのままやらないのか、だれがやれるのだというご意見があります。そういうことも踏まえて先生のお考えをお聞かせいただけませんか。

工藤 ヨーロッパなどを見ていると、社会が確実にアップデートしてい

ます。先ほどスウェーデンの例がありましたが、スウェーデンでは30～40年前に国会議員の男女比は8対2とか9対1と日本と変わらなかった。でもいまは5対5ぐらいになっている。なぜそうなったのか。人権感覚でも何でも学校が社会よりも少し先を走ります。学校で学んだ子どもたちが大人になっていって、社会を変えていくことができる。実は社会を変えていくには、教育を変えて、その教育を受けた子どもたちが社会に出ていくというのが一番早い方法なのです。

日本の教育は残念ながら当事者意識を失ったままです。たとえば10年ごとに学習指導要領が変わるたびに現場の教員たちは、今度の学習指導要領は結局何をやればいいのか。つまり手段にこだわり、本質に立ち戻れないのです。むしろ日本は社会の人権感覚よりも学校のほうが人権感覚が鈍かったりします。相変わらず罵声を浴びせる教員たち、それが従来の教育方法だと言って、それを引かない教員たち。部活動でも結果が出ればオーライで、どんなに罵声を浴びせても、子どもたちを駒のように扱っても優勝すれば尊ばれるみたいな文化が日本の中にはまだ残念ながら残っている。

ヨーロッパも同じような時期があって、それを通り過ぎていく。残念ながら、日本社会全体が変わるまでにはまだまだすごく時間がかかる。その生みの苦しみみたいなものをいまやっている。何で変わらないのかと言われますが、実際はすごく変わっています。日本全国で、あちこちでいろいろな改革が行われていて、たとえば全員や学校全体丸ごと担任をチームで持っていたり、子どもたちが逆指名するという方法を取っている自治体もたくさんあります。

不登校対応にもよい変化がみられるようになりました。不登校は欠席日数が増えて受験に不利なこともあります。今年から広島県は県全体で高校の調査書に遅刻欄と欠席欄がなくなりました。つまりそういった子どもたちもまったく問題なく受験できる仕組みをつくらうと、これは県全体でやっているところもあります。

熊本市は政令指定都市ですが、小中高、特別支援学校などで目標から変えています。「知・徳・体」と掲げるのをやめました。そして先頭に何を挙げたかという、「主体的に生きる子どもの育成を目指そう」と、目標の書き換えも行っています。僕の感覚的には先頭を走っているのは熊本市とか広島県ですが、日本中あちこちでいま変化が起こっていると思います。

大学はどうなっているか

竹花 長谷川先生、大学も旧態依然としているのではないかという意見も結構ありますが、いかがでしょうか。

長谷川 大学も変わっているところもものすごくありますが、大学がどれだけ変わっているかということ自体あまり知られていません。そのことは大変残念だと思っています。私はいろいろなところで言っているのですが、大学だけで何かをやって決めているわけではなくて、大学をめぐる状況はプレーヤーが何種類かいるのです。第1のプレーヤーは大学の先生たち、第2は学生たち、およびその親、第3は卒業生を雇用する会社やいろいろな場所、その三者が大学をどう考えているかということの均衡点、みんながそこに落ち込んでしまうというのが、現状の大学です。

大学はずっと長い間、ほかの社会と切り離されて、親側や学生側から見たら偏差値の高い大学に入ることが一番大事、企業や官公庁など卒業生を雇う側からすると、偏差値がどのくらいの大学の卒業生かが大事で、大学で学んで、自分をどう能力を開花させたり、技術や考え方を身に着けたりしたかという教育の内容は問わない。そうなるとう学生は偏差値の高い大学に入ることだけが目的であとの4年間は一生懸命働く前の遊ぶ時間になって何もしない。

そういう状況にあって、先生たちはどうかと言うと、大学の先生は、自分の研究や自分の好きなことしかやらない人たちだから、何も言ってくれないのだったら自分のやりたい研究ややりたい授業だけやって、あとのことは知りませんということになる。その三者の均衡点が何もしない大学です。

それでも昔は企業などが、おとなしい子さえ出してくれれば、採用したあとに鍛えますからいいですよと言っていた。大学でいったい何を学んだか、どういうことを身につけたか、どういう考え方を持っているかということは問わずに採用してきた。

そういう状態で大学だけが変わろうとしても、親だけ、学生だけが変わろうとしてもだめなので、全員がもっと違うところに持っていかなければだめだと合意してどっと変わらないといけない。それぞれに対する評価が変わるとガラッと変わりますから、それが少しずつ起きつつあって、大学自体がいろいろな意味でずいぶん変わってきました。また学習者本位のカ

リキュラムもこの2～3年言われるようになって、先生たちが好きなことをしゃべればいいということではなくなりました。

大学はずいぶん変わってきていますが、ある研究所で調査をした結果を聞いたのが3年ぐらい前でしたが、雇う側の人事係が自分は見る目を持って人物で決めていますと答えるのだけれど、何をやっているか、その採点の仕方とかを調査してみたら、やっぱり一番聞いているのはその大学の偏差値だったということがありました。雇うときのその見る目を変えていけないといけない。見る目が変わると、学生たちもただ4年間遊ぶのではなくて自分として何か主張できるものを出していけないといけないとなる。そうすると大学のカリキュラムもそういう学生たちの学びに対応しているいろいろなことをカリキュラムとして展開していかなければいけないというプレッシャーになるから、何か全部が変わらないといけない。でもその意味で変わりつつあるとは思いますが。

竹花 布村さんは高等教育局長も短期間ではなかったし、大学の教育のほうもご存じだと思いますがいかがでしょう。

布村 長谷川先生がおっしゃられたとおり大学もずいぶん変わってきてはいます。私が大学に通っていた頃の大学の教育内容を規定していた大学設置基準はずいぶん縛りがあって、教養教育何単位以上、体育何単位以上、教養の中にも哲学とか心理とかが何単位以上、そして専門教育何単位以上と一定の枠がありましたが、それはもう取っ払われています。でもあまりにも大学の自由で一人ひとりの先生が何を教えてもいいのかという議論になって、現在、国家資格につながるような学部ではコアカリキュラムが大学横断的につくられて、一定の内容は担保しようというのが、大学独自の動きとしてつながっています。そこはある程度変わってきています。

一方で教養教育がいまはなくなってしまったと言っていいのかわかりませんが、今日のテーマにつながるような人間とは何か、日本人とは何か、自分とはなんぞやというような議論をする、そういう自分に問いかける、あるいは対話するような時間が大学生や高校生にもっとあっていいのかなと思います。そういう時間をどれぐらい持っているのかなというのは、むしろまた教えていただければと思います。そういった自分の意識を深める時間、自分を見つめる時間が大学生にもっとあっていいのではないかと。

個人的に、私はたまたま学生寮に入って飲み歩いていた面はありますが、飲みながら、あるいは飲まなくてもそういう議論する時間を結構持て

たのは、自分の生き方や教育の重要性に気づいたり、人は本当に十人十色と実感し人と話すことを怖れなくなりました。それは本音の議論をしたからかもしれませんが、そういう場面がもうちょっといまの日本の大学にあってもいいのかなと感想として持っています。

企業や社会のありよう

竹花 長谷川先生の大学に関してのお話の中に、大学に行くのはいいところに就職したいから、就職試験といっても公務員試験とか司法試験とかそういう試験は客観的な力を試す仕組みがありますが、一般の企業に就職するには、面接が主で大学でどういう力をつけたかを問われることがあまりない。そのことが子どもたちを大学で遊ばせることにつながっているのではないかとも思われます。

その社会の側の問題は、先ほど工藤先生のお話の中にも日本の企業の状況が出ていました。最近の日本の企業が、たとえばスマホなどいろいろな分野で外国に負けてしまって技術立国日本とは言い難い状況が見られるのではないかと。何か尖った個性とか、異能とか異端を求める企業経営者はたくさんおられるとは思いますが、しかし実際に採用する段階ではそうした尖った個性などは判断されないまま、やはり大学の名前で採用が決まっていっているという状況があるのではないかと。そのことがやっぱり子どもをいい大学に行かせようという親の営みにも結び付くのではないだろうか。そういうことを考えるとこういう問題はなかなか簡単にはいかないのではないかとも思います。私は若干悲観的ですが、工藤先生、悲観的なのは違いますか。

工藤 僕は楽観的かもしれませんが、日本は変わるときは一気に変わるのではないかと思います。どうやったら変えられるのか。僕が麴町中でも、横浜創英でも考えていることは、未来に通じる教育に転換していくことです。でも大学入試制度がなかなか変わらないので、ある大学に入るためには点を取らなければいけないし、その学力も高めておかなければいけない。でもそれを詰め込んで詰め込んで、あれもこれもやりなさいという方法ではなくて、自分が選んで学んでいくというスタイルの教育システムに変えていく。それを自宅に帰ってからやるのではなくて、学校の中でそれが可能な仕組みです。

だからスカスカの教育計画、教育内容に変えていくのですが、それは手法でできる。それをやっていると自ら学びながらいまの受験制度にも勝っていくことが同時にできるような方法、これが日本の教育を変えてソフトランディングさせるためには一番手っ取り早い方法なのだろうと考えて、それを戦略的にやってきたと思っています。

中高一貫校にいるので将来的には大学入試制度も変えてもらうような、その一手を打てるような教育改革をいまうちの学校でしたいと思っていますし、それは可能だと思います。これは子どもにも教員にも負荷がかからない方法を取っているのです、みんなが伸び伸びとやりながら、いまの軸にも勝ちながら、新たな本当の軸に勝っていく。そういう教育ができれば簡単に横展開すると思います。僕はあまり悲観的に考えていません。

竹花 先生のお話をお聞きしてちょっと皆さんにご紹介したい方がおられます。出口治朗さん、いま立命館アジア太平洋大学の学長をしておられますが、保険会社に勤めていて途中退社され、ご自分で保険会社を立ち上げて成功され、非常な勉強家として知られている方です。その方がいろいろおもしろいお話をされていて、いまの工藤先生のお話と共通するところをお話しします。

子どもたちが大人になってさまざまな分野で活躍し、世界を相手にしていくための武器は尖った個性だ。それには多様性と高学歴が必要だ。高学歴とは単にいい学校を出るということではなく、非認知能力、好きなことを徹底的にやる、学び続ける能力があるということだ。だから親ができることは、子どもが好きなことを徹底的にやらせることに尽きる。子どもたちに自信をもってほしいのなら、他とは比べず点もつけないで、ただやりたいことをやらせる。そして一生懸命やる子どもを励ましてやることだ。未来なんてわからない。だから子どもたちには今を大事にしてほしい。今好きなことを最後までやり抜く力をつけていくことが大切だ。

人間の一番の力は考える力である。最近は探求力と言っているが、要するに問いを立てる力、ゼロから常識を疑う力が基本だ。これを身に着けなければ変化の速い世界の動きについていけなくなる。未来は一人ひとりの意識の持ち方や行動の仕方でも変わる。未来を予想することに意味はなくて、いまの課題がわかったら、自分はどうしたいのか、どういう社会をつくりたいのかということをもみんなで自分事として考えることこそ大切である。子どもたちが好きなことをできる社会をつくるために大人

も頑張らなくてはいけない。子どもが自由に学べる未来の環境を残すことが大人の義務、社会の義務、教育の義務だと思う。このようなことを縷々おっしゃっておられます。

私どもが感じている問題意識は多くの大人社会の中で広がってきているし、現にそれを実践しておられる方もおられます。立命館アジア太平洋大学ではまさに彼のこの考え方に基づいてグローバルな教育が展開されています。ですから悲観ばかりすることはないというふうにも感じます。

さて、いま社会の問題や学校教育の問題についてどういうことができるだろうという話をしてきましたが、少し希望はある、そちらのほうは変わりつつある側面もあるし、場合によっては一気に変わっていくかもしれないというお話もありました。村内さん、親はどうですか。親は何が変わっていないといけなないのでしょうか。

親の子どもへの向き合い方

村内 少子化で1人の子どもにより手をかけたくなるという現状が非常に大きいのではないかと。工藤先生がおっしゃったように手をかけすぎ、面倒を見すぎ、でも子どもたちには自律してほしいという考え方は非常によくわかるのですが、昔のように5人も6人も子どもがいるとなかなか目が届かないこともあるかもしれません。いまは1～2人は当たり前で親はそこに集中しがちです。そこで手をかけるなどと言われても、親としてはじゃあ自分はどうすればいいのかと逆に保護者としては悩んだり、行き場を失うみたいなどころがあるのではないかと思います。

親としては具体的にどうすればいいのか、どういう心構えで子どもたちに接し、教育について考えればいいのか、親に向けての指針みたいなものがあればご教授いただきたいと思います。

工藤 実は麴町中の教員たちもそこをすごく悩みました。もともと子どもは主体的に生まれてきたのに手をかけすぎて主体性を失った子どもたちがもう1回主体性を取り戻すことはすごく大変でした。たとえば、子どもが朝なかなか起きられないと、お母さんは心配して声をかけます。小さいうちはいいのですが、だんだん大きくなってくると、「うるさいよ」とお母さんが良かれと思ってやっているサービスに不満を言う。でも放っておいて遅刻すると、「お母さん、何で起こしてくれなかったの」と結局サービ

スを求める子になっている。「勉強したの、宿題やったの」と声をかけると「うるさい」と。つまり与えられたサービスに不満を言うようになって主体性を失った依存型になっているというのが日本の子どもたちの姿です。

その子どもたちを教育するのに、だめなものだめと毅然として叱るという従来の教育方法ではもっと落ち込んでいく子どもの姿があります。そこで考えたのが、言葉の使い方で、自分たちの指針としてつくったのが三つの言葉です。

一つ目が、何かトラブルを起こしたときに、「どうしたのかい。何か困ったことがあったのかい」と必ず聞きます。たとえばだれかを殴ってしまったら、「何かあったの。何か困ったことがあって殴っちゃったのかい」と聞きます。次に二つ目、「君はこのあとどうしたいの」とこれからのことを必ず聞きます。麴町中の子どもたちはそんなことを言われたことがないので驚きます。最初は言葉が出てきません。三つ目の言葉が、「何か僕に手伝うことはあるかい。支援してほしいことはあるかい」と聞きます。つまりどうしたの、どうしたいの、何か手伝うことはあるかい、この三つです。

普通の学校だったら、飛び出して行った子どもに、「何をやってるんだよ。すぐ戻れ。何でこんなこと我慢できないの。」と言われて、別室に連れて行かれたりします。そうすると子どものために良かれと思ってやっている先生にうるせいなと不満を持つわけです。

でもさっきの方法を取ると劣等感いっぱい、どうせ俺なんか嫌われているんだろうと思っている子どもでさえも、どうしたいのと聞かれて、そうだなと。「いまから授業に戻って1時間我慢をするか、僕が用意する別室にいるか、どうする」と聞くと、「別室に行かせてください」と言います。小さな自己決定ですが、連れて行かれた子は不満を言いますが、自己決定をした子どもは不満を言わない。これを繰り返していると、だんだん、ああ、自分はここにいていいんだ、自分は排除されていないんだということがわかってきて、その先生を信頼し、言葉が通るようになってくる。

麴町中でもいろいろな仕組みをなくしていったのですが、単純に放任しただけなら崩壊状態になる。放任しろ、かかわりをなくせではなくて、リハビリをするためのきちんとした言葉かけや支援が必要で、それを続けていくと子どもは元気になっていく。これは大人の社会でも同様です。上司が部下に使える言葉です。三つの言葉かけで心理的な安全性が担保されている職場はパフォーマンスがものすごく高い。これはグーグルの脳科学を

ベースにした研究で有名になりました。

ですから部下もそうですが、子ども自身が否定されていない、心理的な安全性を担保してあげるとおのずと自己決定ができる空間ができてきて元気になる。かかわりを遠ざけるのではなくて子どもに自己決定をさせているかどうか、その言葉がけができるかどうかにかかわってくるのではないかと考えています。

学校の自由度

竹花 まだまだ議論したいこともありますが、いままでの議論を踏まえて、おっしゃり足りないこと、ここはどうでしょうかというようなことがありますたらお話いただければと思います。まず村内さんからどうでしょう。

村内 工藤先生のお話を聞いていて納得と思われる保護者の方が多いと思うのですが、ここに元文科省教育局長の布村さんもいらっしゃるのであえて伺いたいのですが、僕らの時代、小中学校はクラス分けがあって、担任がいて、テストがあるのが当たり前で、どこも同じようなかたちで同じような学校教育をしてきていたと思います。それは文科省が教育要領で指導をして、校長に権限があると言いながらそういうかたちで学校教育を運営しなさいと言われていたからだと思います。

麴町は公立の中学校にもかかわらず学校教育についていろいろな改革をされたと聞いて、何でそんなことができるのか、そういう前提ではなかったのかと思うのですが、そのへんの整理はどういう認識だったのか。これからいろいろな学校改革が行われていくのはわかるのですが、では今までは何だったのか、改めてお二人に伺いたいと思います。

布村 国際的に比較すると、日本の子どもたちの自尊感情が低いということでしたが、いまの学力調査で日本では福井県の子どもたちが学力とともに自尊感情が高いというデータがあります。大阪大学の先生方が福井県の子どもたちがなぜ自尊感情が高いのか分析すると、一つの要因は三世代同居家族の割合がまだまだ高いこと、二つ目が地域の大人が子どもたちを見てくれていること、三つ目がPTAの協力が大きいこと、四つ目が強力なボランティアの方がいらっしゃることなど、それぞれの地域で大人がかかわっていることが福井の子どもの自尊感情の高さの背景ではないか。一概

に日本の学校制度が機能していないかのような誤解はしないほうがいいのではないかと考えています。

いま村内さんがおっしゃった制度的な側面は、法律でがっちり固められているような感覚はあるかと思いますが、大枠として、学校の教育内容や行事は学習指導要領に示されていますが、一年分の指導要領の量は教科書一冊分にもならない量で、そこに示された項目を、どのように教えるか、どういう行事にするかは、各学校で教員で創意工夫できることになります。

工藤 まず一つは、麴町中でなぜできたのか。僕は行政の教育委員会に10年いたこともあるので校長の法的な権限、どこまで自由度があるかということがよくわかっていました。意識さえあれば日本中どこでもできます。ただ都道府県・市町村の自治体の教育委員会が勝手に忖度をしたり、できないものだと思ってしまっていて、要らない指導をしている可能性は高い。校長がやりたいと思うことを、学習指導要領に従ってやっても自由度があるのに何となく伝統であることをみんなが勝手に守ってしまっているという状況がまず否定できない。日本中どの学校を見ても金太郎あめみたいと同じになってしまっているのです。

でもその根本原因は、もしかすると学習指導要領にあるのかもしれないと僕は思っています。なぜかという、たとえばフィンランドは教育立国として有名ですが、フィンランドの学習指導要領は現場の教員がつくるもので、基本的に自由度がものすごく高い。自由度がとても低い日本で一番感じるのは、ヒト・モノ・カネの権限が校長にないということです。

ロンドンの公立の学校を見に行くと校長先生と話をしていると、音楽の授業中に別室に行く子どもがいるので、あの子たちは音楽の授業を受けないのかと校長に聞いたら、一斉に授業を受ける子どもたちもいるけれど、何人かはプライベートレッスンを受けているんだということでした。プライベートレッスンを受けるためにお金を払ってまた別の契約をして生徒に教えていると。その施設も二次利用、三次利用することで稼いだ分をまた自分で使う権限を校長が持っていたり、人を雇うのも全部校長です。つまりヒト・モノ・カネの権限が相当校長にある。

日本は政治もそうですが、地方自治がなかなか進まなくて、結局国からお金をもらっていくような仕組みです。そういったものも大きく影響していて、教育の世界は特に自律型になっていない。自律型になっていない組織が自律する子どもを育てるのはそもそも無理なのです。だから自律型の

仕組みをつくっていくことが日本には本当に求められているのだと思います。そうは言ってもできることはできます。やれますよ。それに気が付けばいいだけです。

再び親と子どもについて

長谷川 最近少子化で子どもに手をかけたくなくなるというのは、やはり日本の社会だからだと思います。スウェーデンでもどこでも少子化は進んでいて、子どもは1人か2人しか生まないというところが多いのに、スウェーデンの方は子どもは別人格だからと言っているわけだから、それはその社会の文化の問題だと思います。

私は一人っ子です。電気なし、ガスなし、水道なしのアフリカに2年半、チンパンジーの調査で行っていました。寿一と結婚して2人で行っていたことが大きいのですが、その話をすると、学生も親御さん世代も、よく親が許しましたねと言います。でも私たちは許すも許さないも、25歳にもなってアフリカに調査に行くことを誰が阻止するかという態度でした。私の親の世代はもっと上の世代だから戦争を経験したり、違う考え方の人たちでしたが、うちの親はずっとスウェーデンの親みたいに子どもは子どもで何とか自分でやりなさいという態度でした。

両親ともなくなりましたが、それを思うと私は自分が育ってきたこと、両親ともに亡くなりましたが、親のいいところ、悪いところがいまよくわかるから、それを考えてみたりすると、やはり子どもを信頼することがとても大事だと思います。私の親は20歳を過ぎて私がやることを基本信頼して、私が私の選択としてそういうことをやりたいと想っているいろいろな計画もして勉強もしているのだったら、行ってみたらと言ってくれたのだと思います。

小さい子どもは小さい子どもなりに、中学生は中学生なりに、20歳は20歳なりに子どもを信頼することだと思います。そして自己決定させて、信頼するためにはリスペクトがないといけない。あなたは大事なかけがえのない存在で、それは全力で守ってあげたいんだけど、あなたは別の人格であなただけが決定する権利があるのだからあなたの考えをリスペクトしましょうという考えです。

相手に対して完全にパターンリスティックに、私が何でもやってあげる

からねみたいなことではなくて、リスペクトがあって信頼してあげるという態度で臨んでいく。親が全部カバーしてあげられるわけがないので、そういうことも含めて、私の人生、親を振り返っての感想です。

工藤 親としては子どもに後悔のない生き方をさせたいと思いますが、これだけ変化の激しい時代ですからこうしたほうがいいよといったことがなおさら通用しない時代です。右肩上がりの時代ではなくて、まったく違う時代です。もし自分の一言で子どもが進路を決めて、その選んだ進路で後悔するようなことがあったとき、悔やみきれない。

うちは中高一貫校で、中学校から入学してくる子もいますが、その保護者に必ずこう言います。ただか付き合いはあと10年ですよ、12歳の子どもとはあと10年ぐらいしか付き合えませんよ。子育ては、どう手をかけるかではなくて、どう手を放すかでしょう。だからその手の放し方を逆算していかないと後悔しますよと。子どもが親のせいと言わない子どもにしてあげること、それが親が最低、精一杯できることではないかと思えます。

むすびに

竹花 時間になってまいりました。十分議論が尽くされたかとなりますと、特に学校教育のありよう、それをどう変えていくのか、まだまだ検討しなければなりません。チャットでも、もう少し抜本的に考えるべきだ、だれでも東大に行きたいやつには行かせればいい、しかし簡単に卒業できないようにすればこの問題の解決策で最も効果的だ、そういうことも考えたらどうかというご意見もありました。

さまざまなお意見があるべきですし、議論もするべきだと思いますが、今日のこれまでの議論で私が感じましたのは、やはり大人社会、すなわち教育、家庭、社会の子どもたちに対する向き合い方の考え方についても少しみんなで合意事項みたいなものをつくる努力したほうがいいのではないか。今の子どもたちの大人社会に対する見方は自分たちがランク付けされる、その奥の主要な要素はやはり勉強ができるかどうかだと思込んでいる向きが子どもたちにはあるのではないか。

しかし時代は変わって社会で求められる能力は多様だし、それぞれ得意な分野はあるわけだから、そこで生きていけばいい、勉強だけがあなたの

価値を決めるものではないという気持ちを大人社会が持って子どもたちに接していくことがすごく大事ではないかと先生たちのお話を聞いて強く感じました。私自身の反省も含めてやっぱり子どもたちの多様な能力を信じるのがすごく大事だと思いました。

また工藤先生が自律という言葉をお使いになりますが、子どもたちが自分でものを考えて、自分で決定し、自分で行動する力を身につけることにもう少し大人社会が真剣であってしかるべきではないかということも今日の議論の中で繰り返し述べられたことではなかったかと思います。

全体として大人社会の責任という観点で言うならば、われわれはなぜこういう議論をするのか、二つの視点があるように思います。一つは子どもたち一人ひとりに幸せな人生を送ってもらいたい、納得する人生を送ってもらいたい、そのために親や学校がそれを妨げるようなことをしていないかということをよく考えて、子どもたちを信頼して子どもたちの多様な力を伸ばしていくという方向で動いていくことがすごく大事ではないだろうか。

もう一つは、そうしてこそ初めて豊かな社会、生き生きとした社会をつくれることにつながるのではないだろうか。子どもを持つ人、あるいは私も含めてもうすでに老人となった人の最低限の役割としてそういう大人社会をつくりあげていくといった点で、今言ったような振る舞いをきっちりとしていくことが必要であろうということも思います。

しかしなお大きなエネルギーがこの問題の解決には必要だということも今日強く感じました。非常に問題が難しいし、この問題は本当に解決できるのかという思いもありました。しかし今日のチャットでも、この資源のない国日本で人間がどう育っていくのかということはこの国の社会の非常に大きな課題だろうというご意見がありました。そういう点で今私どもが議論した問題を心ある行政や教育関係者、政治家の皆さん方は少し受け止めていただいて、自分たちの立場でできることを考えていただきたいという強い希望を持つところです。

今日、2時間余にわたりまして非常に難しい問題を議論してまいりました。熱心にお聞きいただきましてありがとうございます。またオンラインで聞いておられる方々もチャットもたくさん寄せていただきました。ありがとうございます。工藤先生が実践のど真ん中であって全国を率いてくださることを心から期待をいたしますし、長谷川先生や布村さんがこれま

での経歴を生かして、これをサポートし、大きな力になっていくことを本当に強く期待をいたしたいと存じます。おやじ日本としてもできることがまだまだあるだろうと思います。頑張りますのでどうぞよろしくお願ひします。

今日は皆さん、本当にありがとうございました。

2022年6月26日（日）

おやじ日本のあゆみ

(概略。詳細については当法人紹介パンフレットに記載しております。)

- 2004年
平成16年
- ・おやじ日本設立宣言
 - ・「総監督」に星野仙一氏と野村萬斎氏が就任
 - ・おやじ日本全国大会及びおやじ東京全都大会 6月27日(日)
基調講演「おやじ、頑張ろう！」 講師：星野仙一氏
パネルディスカッション「おやじ、知ってくれ！」
- 2005年
平成17年
- ・おやじ日本全国大会及びおやじ東京全都大会 6月26日(日)
基調講演「気づかせて育てる子どもの力」
講師：山口良治氏(元伏見工業高等学校ラグビー部総監督)
パネルディスカッション
「子どもが安心して、いきいきと育つ地域とは」
- 2006年
平成18年
- ・おやじ日本規約制定
 - ・83運動推進開始 協力：(株)電通CSR室社会貢献部
 - ・おやじ日本全国大会及びおやじ神奈川設立大会 6月11日(日)
全員参加型パネルディスカッション
「子どもと地域の為に、おやじ汗をかこう」
パネルディスカッション「おやじ！知ってくれ」～携帯電に
翻弄されない子どもを育てよう～
 - ・豊橋おやじネットワーク発足
- 2007年
平成19年
- ・携帯フォーラム・イン千葉 3月4日(日)
「おやじ！知ってくれ～子どもと携帯～」
 - ・おやじ日本全国大会及び千葉おやじネットワーク設立大会
6月3日(日)「～広げよう、千葉おやじの輪～」
- 2008年
平成20年
- ・おやじ日本発「iS運動」推進開始
「おやじ宣言～立ち上がれ！おやじ」発信
 - ・おやじ日本全国大会及び埼玉おやじネットワーク設立大会
6月1日(日)「～広げよう、埼玉おやじの輪～」
第1部 「立ち上がれ！おやじ～子どもを守るおやじの輪～」
第2部 パネルディスカッション 「ケータイの今～ケータイは危険？あなたはどうか考える～」
- 2009年
平成21年
- ・特定非営利活動法人おやじ日本設立 (2月9日法人登記完了)
 - ・おやじ日本山形発足 4月11日(土)
 - ・特定非営利活動法人おやじ日本設立記念大会 6月7日(日)

「世界のおやじ、日本のおやじ。～語ろうじゃないか、子どもへの思い～」於：渋谷 CCL e m o n ホール

- 2010年
平成22年
- ・おやじ日本しまなみ設立準備会 1月16日(土)
 - ・第7回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会 6月20日(日)
「おやじたちの争点—公教育のあり方をめぐって(学校五日制、塾、部活 e t c。)—」
パネルディスカッション
コーディネーター 早川信夫氏(NHK 解説委員)
 - ・おやじ日本広島設立記念大会 7月14日(日)
 - ・第8回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会山形大会
11月6日(土) 講演「育てたように子は育つ」
パネルディスカッション「未来を開く子供たちをどう育てるか」
 - ・第33回渋谷区くみんの広場参加
- 2011年
平成23年
- ・第9回特定非営利活動法人おやじ日本全国大会 6月5日(日)
「学校は社会の変化に対応できているか。そして親は…—おやじ日本の問題提起—」
パネルディスカッション
コーディネーター 早川信夫氏(NHK 解説委員)
 - ・「未来教室」(学校と企業との連携支援)実施開始 実施校11校
 - ・第2回おやじ日本広島大会
- 2012年
平成24年
- ・第4回愛知おやじサミット in 大口 1月28日(土)
「おやじの子育て—子どもも育つ、おやじも育つ、地域も育つ人づくり—」
 - ・国税庁長官より認定特定非営利活動法人に認定される。
(認定日6月4日)
 - ・第10回認定特定非営利活動法人全国大会 6月24日(日)
「未来教室」へのお誘い—キャリア教育を広げるために—
総合司会 早川信夫氏(NHK 解説委員)
 - ・「未来教室」(学校と企業との連携支援)実施校21校
 - ・第3回おやじ日本広島大会 11月25日(日)
- 2013年
平成25年
- ・第4回おやじ日本広島大会 4月13日(土)
於：三滝グリーンチャペル 東日本大震災復興チャリティコンサート「千の音色でつなぐ絆」
 - ・創立10周年記念全国大会 6月30日(日)

「広がれ！おやじの輪～語ろう子どもたちと～」
ヴァイオリン（東日本大震災復興支援～ヴァイオリン・プロジェクト「千の音色でつなぐ絆」～津波で流失した陸前高田のマツや建材から作られたヴァイオリン）演奏

総合司会 早川信夫氏（NHK 解説委員）

第1部「広がれ！おやじの輪～おやじの汗に乾杯！～」

おやじ日本広島「子どもたちに感動を」

豊橋おやじネットワーク「地域へもっと足を運ぼう」

大子自然塾「自然体験を子どもたちに」

おやじ日本山形「学校へ出かけよう」

おやじ日本「未来教室～学校に社会の風を吹き込もう～」

第2部「これから ～日本の子どもたち～」

基調講演 講師：ダニエル・カール氏（タレント）

パネルディスカッション ダニエル・カール氏 他

・「未来教室」（学校と企業との連携支援）実施校 35校

2014年
平成26年

- ・第6回おやじ日本広島大会 4月6日（日）
- ・東京都公立小学校長会意見交換会 5月13日（火）
- ・東京都公立中学校長会意見交換会 5月27日（火）
- ・第12回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6月29日（日）「災害国日本の親、おやじに問われていること」～助けられる人から助ける人へ～
基調講演/パネルディスカッション「災害国日本の親、おやじに問われていること」～助けられる人から助ける人へ～
コーディネーター 早川信夫氏（NHK 解説委員）
- ・世田谷区立等々力小学校おやじの会創立20周年祝賀会
7月20日（日）於：世田谷区立等々力小学校
- ・千葉県市原市青少年育成ちはら台地区民体験講演会
9月20日（土）於：ちはら台コミュニティセンター
- ・「未来教室」実施校 53校
- ・「防災教室」11月12日（水）於：渋谷区立原宿外苑中学校

2015年
平成27年

- ・第13回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6月27日（日）「スマホと子どもたち～スマホどうする、おやじ！考えようじゃないか～」
基調講演「スマホ時代の大人が知っておきたいこと」
講師：竹内和雄氏（兵庫県立大学環境人間学部准教授）
基調講演「今子どもの心に何がおきているのか」

- 講師：小野和哉氏（東京慈恵会医科大学准教授）
 パネルディスカッション
 コーディネーター早川信夫氏（NHK 解説委員）
 パネリスト ダニエル・カール氏（タレント）他
- ・第7回おやじ日本広島大会 フットサル大会 10月25日（日）
 - ・「未来教室」実施校48校
 - ・i S運動推進「スマホ安心・安全教室」
 - ・防災教室推進
- 2016年
平成28年
- ・埼玉おやじネットワーク講演会 「スマートフォンが与える青少年への影響と対策」2月21日（日）
 主催：上尾市青少年育成連合会 原市地区会議
 - ・第14回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
 6月26日（日）「パラスポーツの未来～結構深いぞ 障がい者スポーツ！～」
 基調講演 「知っていますか？ パラスポーツ」
 講師：仲前信治氏（(公財)日本障がい者スポーツ協会
 強化部強化支援課課長代理）
 デモンストレーション「ウィルチェアラグビーはおもしろい！」デモンストレーター
 小川仁士氏（「BLITZ」埼玉所属）
 パネルディスカッション「結構深いぞ 障がい者スポーツ」
 コーディネーター 竹花 豊（おやじ日本理事長）
 パネリスト 田口亜希氏（パラリンピアン・射撃）
 長谷部健氏（渋谷区長）内田賀文氏（パナソニック株式会社
 パラリンピック統括部長）他
 - ・豊橋おやじネットワーク おやじフォーラム2016
 11月22日（火）竹花豊理事長講演会
 11月23日（祝）栄おやじの会西居院慰問 廣中顧問見舞兼
 - ・「未来教室」実施校49校
- 2017年
平成29年
- ・第15回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
 6月25日（日）「パラスポーツの未来Ⅱ～パラスポーツから元気をもらおう！～」
 基調講演「冬季パラリンピックがやってくる」
 講師：大日方邦子氏（日本パラリンピアンズ協会副会長）
 デモンストレーション「やってみよう ボッチャ」
 協力 日本ボッチャ協会 都立光明学園生徒

パネルディスカッション「パラリンピアン大いに語る！」

コーディネーター 早川信夫氏 (NHK 解説委員)

パネリスト 上原大祐氏 (NPO 法人 D-ShiPS32 代表)

大日方邦子氏 (日本パラリンピアンズ協会副会長)

ダニエル・カール氏 (タレント)

長谷部健氏 (渋谷区長)

マクドナルド山本恵理氏 (日本財団パラリンピックサポート
センタープロジェクトリーダー・パワーリフティング選手)

・「未来教室」実施校 59 校

2018年

平成30年

・第17回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会

6月24日(日) パネルディスカッション 「18歳はもう大人!？」

総合司会 宮本 隆治氏 (アナウンサー)

インタビュー 「日本の内と外を語る」

パッケンマッケン (タレント)

小山 裕介氏 (コントロール・リクス・グループ (株) 日本
総代表兼シニア・パートナー)

マクドナルド山本恵理氏 (日本財団パラリンピックサポート
センタープロジェクトリーダー・パワーリフティング選手)

「私たちはこう思う!」 東京都立日比谷高校生 東京芸術
大学音楽部附属音楽高等学校生 慶応義塾大学生

「大人たちにも言わせてほしい!」

長谷部健氏 (渋谷区長)

武内彰氏 (東京都立日比谷高校校長)

長坂敏文 (おやじ日本監事 十文字学園女子大学名誉教授)

大学生 高校生

・「未来教室」実施校 59 校

2019年

令和元年

・認定NPO法人おやじ日本設立15周年記念大会 (第18回全

国大会) 「さてどうする? 令和のおやじ ~社会の変化とこれからの
おやじ~」 6月23日(日)

パネルディスカッション 「さてどうする? 令和のおやじ
~社会の変化とこれからのおやじ~」

コーディネーター

三宅 民夫氏 (元NHKエグゼクティブアナウンサー)

メインスピーカー パッケンマッケン (タレント)

長谷部 健氏 (渋谷区長)

長谷川 真理子氏（総合研究大学院大学学長）
竹花 豊（おやじ日本理事長 元東京都副知事）
登壇者 エドバーグ・ヤコブ氏（実業家 スウェーデン）
ノラ・コットマン氏（家族人類学者 ドイツ）
きらら弦楽合奏団メンバー オール世田谷おやじの会
横浜市立川和東小おやじの会 掃除に学ぶ会 張晶子氏
スコレ家庭教育振興協会 杉並区立小学校 PTA 野球協議会

・「未来教室」実施校 58 校

2020年
令和2年

・第19回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
コロナ感染拡大影響の為延期 会議等オンライン実施

・「未来教室」実施校 10 校

2021年
令和3年

・第19回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
6月27日（日）「AIは人間を幸せにするのか？ 子どもたち
と考える」（同時ライブ配信）
基調講演「Aiの“今”と“これから”」
講師：西垣通氏（東京大学名誉教授）
パネルディスカッション
コーディネーター
三宅民夫氏（元NHKエグゼクティブアナウンサー）
パネリスト 西垣通氏（東京大学名誉教授）
長谷川真理子氏（総合研究大学院大学学長）
工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校長）
パッケンマッケン（タレント）
長谷部健氏（渋谷区長） 他

・「未来教室」実施校 30 校

2022年
令和4年

・第20回認定特定非営利活動法人おやじ日本全国大会
（同時ライブ配信）
6月26日（日）「子どもに対する大人の責任を果たすため
に～自信を持った子どもを育てよう」
基調講演
講師：工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校長）
パネルディスカッション
パネリスト

- 長谷川眞理子氏（総合研究大学院大学学長）、
工藤勇一氏（横浜創英中学・高等学校長）
布村幸彦（おやじ日本理事・元文部科学省初等中等教育局長）
村内敦（おやじ日本理事・オール世田谷おやじの会会長）
コーディネーター
竹花豊（おやじ日本理事長・元東京都副知事）
- ・「未来教室」実施校 7 校（7 月現在）

【発行】 認定特定非営利活動法人おやじ日本

住所 〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂1-2-3 渋谷フクラス17階

電話 03-4577-9752

ホームページ：<http://oyaji-nippon.org/>

E-mail：desk@oyaji-nippon.org

編集 京須和恵 小山洋子

編集協力 片山 潮

写真提供 小川祐一郎

本誌記載の内容は全て無断転載を禁じます。